

引揚死没者慰霊祭の挙行・「引揚船入港の地加治木」
の碑建立に関する委員会活動記録及び関係資料

1999年4月

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

目 次

◇写真

- ① 引揚死没者の墓及び「墓碑由来記」の碑 ② 「引揚船入港の地 加治木」の碑

◇目次

◇序文に代えて			P 1
◇慰霊祭・記念碑建立の歩みの始まりとなった手紙			P 2
◇仮称加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会結成へのご協力依頼の件			P 4
◇第1回実行委員会の開催のご通知			P 6
◇加治木港引揚死没者慰霊祭実施及び募金へのご協力依頼（自治会長宛）			P 7
◇加治木港引揚死没者慰霊祭関係			
① 表紙			P 9
② 加治木港引揚死没者慰霊祭と			
「加治木への引き揚げ」を語り聞く会実施要領			P 10
③ 御挨拶	加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会		P 11
④ 追悼の辞	慰霊祭実行委員長	下猶 篤男	P 12
⑤ あいさつ	沖縄県知事	大田 昌秀	P 14
⑥ 弔いのことば	ダバオ会沖縄県支部長		
	沖縄ダバオ会加治木町慰霊団団長	中村 源照	P 16
⑦ 「加治木への引き揚げ」を語り・聞く会開会挨拶			
	慰霊祭実行委員会事務局長	川崎 兼孝	P 17
◇墓碑由来記（碑文及び解説）			P 18
◇慰霊祭終了についての御礼（沖縄県平和推進課長宛）			P 19
◇鹿児島県加治木での引揚死没者の遺族等関係者調査依頼の件			P 20
◇仮称「引揚者上陸地の碑」建立のお願い（加治木町長宛）			P 21
◇仮称「引揚船入港地加治木」の記念碑建立に関する委員会開催の件			P 22
◇仮称「引揚船入港地加治木」の記念碑建立に関する委員会結果報告			P 23
◇『引揚船入港の地加治木』の碑除幕式のご案内（町民宛）			P 25
◇『引揚船入港の地 加治木』の碑除幕式関係			

① 表紙		P 2 6
② 『引揚船入港の地 加治木』碑文		P 2 7
③ 除幕式等実施要項		P 2 8
④ 式辞	慰霊祭実行委員長	下猶 篤男 P 3 0
⑤ 挨拶	鹿児島県知事	須賀 龍郎 P 3 1
⑥ 祝辞	加治木町町長	宇都宮明人 P 3 2
◇新聞を見て寄せられた『加治木への引き揚げ』に関する手記		
① 手を真っ赤にしておにぎり作り	竹山 洋子	P 3 3
② 引揚船上で 加治木の収容所で 亡くなられた子供さん達に	向江 幸子	P 3 4
◇加治木町老人クラブ連合機関紙『百歳だより』第42号より		
① 「入港の碑」建立に寄せて	山下 良子	P 3 5
② 亡き兄を偲んでの短歌	松元 幸子	P 3 5
◇加治木地区に仮埋葬中の引揚死没者名簿（その1）		P 3 6
◇加治木地区に仮埋葬中の引揚死没者名簿（その2）		P 4 0
◇御遺骨伝達に至るまでの経過の概要（鹿児島県民生部長発公文抜粋）		P 4 6
◇『加治木への引き揚げ』を知る手がかりとして		
= 『鹿児島引揚援護局史』抜粋 =		
1、はしがき		P 4 8
2、加治木事務所設置		P 5 2
3、加治木港に第一船入港		P 5 2
4、引揚概況		P 5 2
5、占領軍との関係		P 5 3
6、残務整理		P 5 3
7、引揚船舶の概況		P 5 3
8、引揚者の概況		P 5 3
9、送出者の概況		P 5 4
10、孤児及び無縁故者の取扱		P 5 5
11、加治木に於ける引揚者中死没者の墓地		P 5 5
12、主として加治木事務所時代を回顧する座談会速記録		P 5 6

◇「ダバオ会」編の『ダバオ開拓移民実録史』より

カナリンの戦争っ子の歩んだ道 沖縄ダバオ会会員 仲村 愛子 P 5 8

◇海軍経理学校三十五期クラス会「珊瑚会」編の『あゝ復員船』より

プロローグ 復員輸送はこうして行われた 高橋 辰雄 P 6 1

ダバオ、最初の引揚げ 村岡 敬公 P 6 2

捕虜間で険悪な対立 高橋 信雄 P 6 5

釜山で危うく拉致 池田 秀夫 P 6 6

麗子ちゃん いまいずこ 吉岡 秀夫 P 6 6

◇鹿児島日報（鹿児島県立図書館所蔵）の加治木への引揚関係記事 P 6 8

◇新聞記事

① 琉球新報 1995年8月29日 「50年目の慰霊祭を計画」 P 7 0

② 同上 1995年10月6日 「沖縄出身死没者は 238人」 P 7 1

③ 同上（夕刊） 1995年10月28日 「引揚死没者慰霊祭に出発」 P 7 2

④ 同上 1995年10月29日 「あれから50年、今でも妹のことが」 P 7 3

⑤ 同上 1995年10月30日 「無念、50年目の涙」 P 7 4

⑥ 同上（夕刊） 1995年10月30日 「飢餓、寒さ、相次ぐ子の死」 P 7 5

⑦ 南日本新聞 1995年10月30日 「上陸・永眠の地 加治木で慰霊祭」 P 7 6

⑧ 毎日新聞 1995年10月30日 「沖縄の遺族 50年ぶり『再会』」 P 7 7

⑨ 琉球新報（夕刊）

「50年目の祈り」上 10月31日 「『怖い』とおびえる弟」 P 7 8

「50年目の祈り」中 11月1日 「戦禍知り平和の心に」 P 7 9

「50年目の祈り」下 11月2日 「平和な世界に向け努力」 P 8 0

⑩ 南日本新聞 1998年10月30日 P 8 1

「『引揚船入港の地加治木』の碑 平和祈願し 除幕式」

⑪ 鹿児島新報 1998年10月30日 P 8 2

「悲惨な歴史は繰り返すまい 戦後50年機に記念碑」

⑫ 毎日新聞 1998年10月30日 P 8 3

「帰郷を目前 無念の死 戦争の悲劇 後世に」

◇慰霊祭関係会計報告 P 8 4

◇編集後記 P 8 5

引揚者の収容所でもあった加治木町錦江小学校裏、吉祥寺墓地にある自然石に「魂」の文字を刻んだ引揚死没者の墓、及びその左脇に、1995年10月29日に建立した「墓碑由来記」の碑



加治木町錦江町を流れる塩入川の河畔、塩入橋の袂にある町有地（旧塩入地区公民館敷地跡で、現状は小緑地）に、1998年10月29日に建立した「引揚船入港の地 加治木」の碑



序文に代えて

1995年6月23日の設立呼びかけ以来の、加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会の活動を示す資料集を刊行するに当たり、私たちがこの3カ年有余の間に取り組んだきた事業のあらましを述べるとともに、関係者各位へ心底からの感謝の意を表したいと思います。

- 1、1995年10月29日、戦後50年周年を記念して、敗戦直後における海外からの引揚港であった加治木に、引き揚げて来たものの、故里の土を踏む事なく加治木の地で相果てられた悲運の人々の慰霊祭を挙行し、その墓碑の由来を永く後世に伝えるため、石碑を建立しました。
- 2、1998年10月29日、加治木が全国でも数少ない引揚港であったという歴史を後世に伝え、引き揚げの悲劇を二度と繰り返すべきではないという私たちの決意を多くの人々に訴えるため、「引揚船入港の地加治木」の碑を建立しました。

二つの事業の成功は、ひとえに加治木町民及び沖縄県ダバオ会の皆様方からの金銭的、精神的なご援助、加治木町当局、沖縄県当局及び鹿児島県当局、募金の窓口となっていた加治木町社会福祉協議会事務局、マスコミ関係者その他の多くの方々のご理解、御協力の賜物と思います。

この事業推進のため、委員会としても多くの文書を作成し、また個人、各機関からも多くの文書をお寄せいただきました。その一部をここに集めました。また、多くの方々から加治木への引き揚げに関する貴重な体験記録を寄せていただきました。それも併せて掲載させていただきました。

多くの方々の善意と御協力に対する感謝の意を表明するとともに、この資料集をまとめるに至った趣旨を記し、序文に代えたいと思います。

1999年4月15日

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

委員長	下猶篤男		
副委員長	武田信雄	松田弘治	
委員	戎 倉男	岡山秀樹	川崎兼孝
	白尾春樹	永井和則	西迫雅子
	林 敏克	松田繁美	宮路義和

慰霊祭・記念碑建立の始まりとなった手紙

1995年6月23日、加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会の結成を呼びかけ、同年10月29日、吉祥寺墓地で慰霊祭を挙行、1998年10月29日、塩入川河畔の小公園に「引揚船入港の地 加治木」の記念碑を建立するに至る一連の歩みの直接のきっかけは、1995年1月16日付けの朝日新聞に載った、沖縄における「平和の礎」建設に関する記事であった。以下は、この記事を見て、川崎が沖縄県庁の「平和の礎」担当者へ出した手紙である。これに応じて、沖縄県知事公室平和推進課の知念勇進課長より、御返事と関係資料を送付していただいた。

前略、小生は、北九州市の病院で手術を受け、現在、療養中の者で、今月末頃には退院し、鹿児島県加治木町へ帰る予定です。

私の住む加治木町は、錦江湾北岸に位置する町で、1945年10月29日以降、敗戦に伴う海外からの引揚港となったところです。その年の12月中旬頃までに、約3万人が、主として南方諸地域、中国大陸から加治木港に上陸しました。

1945年11月上旬、フィリピンのダバオから引き揚げて来た人々は、殆どが女・子供で、この人々を始めとして、加治木に上陸した人々は、現在では国立南九州病院と呼ばれ、当時は日本医療団加治木療養所と呼ばれていた病院をはじめとして、町内及び隣町の小学校等に収容されていました。（元気な復員軍人で、本土に家のある人々は、二、三日したら、それぞれの家に帰っていきました。）

このフィリピン・ダバオからの女・子供の引揚者の中には、貴県出身者及び鹿児島県奄美諸島出身者が多かったように思いますが、これらの人々をはじめ、約3万人に近い引揚者の中から、三百名を越える人々が、折角、加治木の土を踏んだばかりで、栄養失調、その他の病気で死んでいきました。死んだ人々の遺体は、前記、国立南九州病院内に穴を掘り、数段に重ねて葬られました。

しかし、1947年1月頃、引き揚げ業務終了に伴い、埋葬されていた遺体を掘り上げて焼き、遺骨の一部は鹿児島市内の寺院に預けたとのことですが、多くは現地の残されたようです。貴県出身者で、身寄りの人の遺骨を引き取りに来られ、病院の西側を流れる別府川の水で洗骨し、持って帰られた人もいらしたとのこと。

その後、1950年頃でしょうか、現地に残されていた遺骨（この中には、結核療養所であった加治木療養所で死去した者の内、身寄りから引き取られないままに、当療養所内に埋葬されていた人々の遺骨も含まれています）は、加治木町の錦江小学校裏にある吉祥寺墓地の一角に改葬されました。現在、そこには、自然石に「魂」の文字一字のみを刻した墓が

あります。

小生、鹿児島県下の小中学生を対象とした『夏・冬休みの友』の執筆にかかわっていません関係から、昨1994年、の『夏休みの友』（中学1年生用）に、歴史読み物として、上述の引き揚げに関する文章を執筆しました。

これを、昨年7月頃、毎日新聞が社会面で取り上げられ、8月上旬には、地元のMBCがテレビでも報道してくれました。

私としましては、地元加治木の有志に働きかけ、戦後50年の今年、命からがら加治木に上陸されたものの、この加治木で身寄りに見取られることもなく、一命を奪われた方々の御冥福を祈る慰霊祭をささやかながら挙行したいと考えています。勿論、遺族の方がおいでなら、その慰霊祭に参加していただきたいと考えます。

大変、前置きが長くなりましたが、昨日（1995年1月16日）、病床で見た朝日新聞の社会面に、「『平和の礎』刻む名確認を」「名簿14万5000人、各戸に」という見出しの下に、貴県及び貴県住民の皆様方のご尽力で、太平洋戦争関係戦没者の氏名が明らかにされつつあることを知りました。さすがと感じております。

ところで、これら戦没者氏名の中に、貴県出身者で加治木に上陸後死去された方々の氏名が含まれているのかどうかを知りたく存じます。昨年、MBCが取り上げてくれました時、地元（鹿児島県庁・南九州病院等）には、死んだ方々の名前を知る資料が無く、且つ、厚生省にも当たったが明確にならなかったとのことでしたので、如何かと案じています。

貴県出身者で、戦前、ダバオ方面に多数出かけていらしたことは事実ですし、引き揚げて来た加治木から、郷里沖縄に帰りたくても、敗戦直後の当時のこと、なかなか帰れない事情があり、多数、町内の小学校の教室に収容されておいでだったことも事実です。また、その中から、毎日のように多くの死者が出たことも事実です。

小生といたしましては、

- 1、加治木上陸後、死去された貴県出身者の氏名を教えてください。
- 2、1945年11～12月、加治木に上陸され、現在も御健在で、当時の状況を知っておいでの方がいらっしゃるなら、その方のご氏名、ご住所等を教えてください。

のです。

入院中の身で、手元に資料も無く、人数、年月日等については、不正確な点もある文章で迷惑をお掛け致しますが、小生の気持ちをお汲み取り下さり、何等かのご返事を下さいますよう、お願い申し上げます。

草々

1995年1月17日

沖縄県「平和の礎」担当様

川崎兼孝

1995年6月23日

殿

実行委員会結成準備会開催呼掛人

川 寺 兼 孝

仮称加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会結成へのご協力依頼の件

日々ご多用のことと拝察いたします。日頃、いろいろとお世話になっております南塩入の川寺でございます。上記の件に関して、突然のご連絡を致しますことをお許し下さい。

同封の『三十六万人が上陸した加治木と鹿児島島の港』をご覧になりますとおわかりいただけますように、1945（昭和20）年10月29日から12月8日までの間、加治木は全国11カ所に設置されました引揚船入港地の一つとされていました。

南方諸地域、中国大陸等から、引揚船が加治木沖に続々と入港、復員軍人、一般邦人からなる引揚者は、木田新田地区の通称「三の水門」付近に設置された仮棧橋から上陸、加治木療養所（現在の南九州病院）、錦江小、建昌小、帖佐小、重富小などの収容所へ収容されました。その数は26、780名とされています。

この内、不幸にして加治木、始良などの収容所で319名の方々が死没されています。そして、死没者の多くは、フィリピンあたりから帰国した沖縄県出身の一般邦人でした。

加治木療養所や帖佐療養所に埋葬されていたこれら319名の引揚死没者の遺骨の中で、遺族による引き取られることの無かった約200体の遺骨は、加治木療養所で結核のために死没され、療養所内の墓地に埋葬されていた方々の遺骨とともに、錦江小学校裏の吉祥寺墓地の一角に改葬されています。

本日6月23日、沖縄県では、沖縄戦終結50周年に当たり、永久の平和を希求し、戦いの中で倒れた多くの人々の冥福を祈るため、敵味方ともにその名前を石に刻んだ『平和の礎』の除幕式が挙行されます。

この『平和の礎』建立のために、沖縄県が作成した調査資料により、1945年10月末から12月始め迄の間に、加治木上陸後に死没した人と推定される130名の名前や年齢が判明しています。それによりますと、130名の内、19才未満が100名で、この内、10才未満の子供が84名となっています。

今年3月、町興しのイベントとして「馬踊り」を導入しようとして沖縄県金武町の町長さんをはじめとするご一行が加治木に見えました。幸い、私もその方々にお会いする機会を得ました。そして、その方々を通じて、加治木に沖縄県出身者を含む引揚死没者の墓があるという事実と今年11月頃、加治木の心ある方々とともに慰霊祭を行いたいと私共の何人かが願っているとのことが、「沖縄タイムス」「琉球新報」により沖縄の人々に伝えられました。

この新聞記事により、今年5月、沖縄より比嘉貞子さんが加治木に見えられ、加治木町福祉課長の山口さんその外の方々のご案内で、前記の墓地を始め、関係の各所を回られたことは、南日本新聞や始良新報の紙上に報じられましたのでご承知のことと思います。実はこの折り、比嘉さんのお母さまの古波蔵オト様より、娘の貞子さんを通じて、慰霊祭に使ってくれとのご趣旨かと思いますが金5万円をいただき、現在、私が預かっています。

戦後50年の長い歳月の間、遺族の多くにその墓地の存在すら知られる事なく、何の叫び声をもあげる事なく、人知れず、異郷の地に眠る人々の霊を慰めるということは、わずかの人数でもできないことではありません。しかし、できることなら、加治木のより多くの人々のご賛同とご協力を得て実施してこそ、悲運の死者の冥福を祈る思いはより深く、より強くなり、意義あるものとなると思います。

これまでの経過の一端と私の思いをあなたにお伝えして、是非、実行委員のお一人として、ご協力いただきたくお願い申し上げます。

適当な日に、慰霊祭実行委員会結成の為の準備会を開催し、協議を重ねて実行委員会の結成に結びつけようと考えています。同封のはがきで、実行委員をお引受けいただけますかどうかをお尋ねいたします。何とぞ、お引受け下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。

1995年7月20日

実行委員の皆様へ

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会
世話人 川崎 兼孝

第1回実行委員会の開催のご通知

先日の準備会にご出席いただきました方々、その後、委員への就任を御快諾下さいました方々、ご苦労様です。上記の会を下記の要領で開催致したく存じますので、ご通知致します。お一人お一人が、極めてご多用な方々ばかりではございますが、是非ともご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

- 1、日 時 1995年8月1日(火曜日)午後7時半
- 2、場 所 塩入川河畔の塩入地区公民館
- 3、協 議

(1) 準備会以後の経過報告

(2) 準備会で協議した事項及びその他の事項の正式決定

① 慰霊祭実施期日 1995年10月29日(日曜日)

② 慰霊祭およびこれに伴う行事

ア、慰霊祭は、出来るだけ多くの人の協力、賛同を得るために、宗教色を出さないので、墓前に菊の献花をする形で実施する。時間は午前10時より。

なお、沖縄より見える遺族の方々の手による慰霊祭には、招待されたら役員、有志が参加する。

イ、慰霊祭の終了後、出来ましたら午前中に、錦江小を借りて、引き揚げ当時の状況を多くの町民に知ってもらうため、関係者による回顧座談会を実施する。

ウ、吉祥寺の当該墓碑の近くに、この墓碑の由来を記す石塔を建立する。

※通称「三の水門」付近に、加治木港が引揚船入港地であったことを記念する石碑を建立されるよう町当局に働きかける。

③ 慰霊祭の実施に伴う費用の捻出のため、寄付金を、どのくらい、どのような形で、集めるか —— そのための町民の皆さんへの呼びかけの方法

ア、町広報紙により、慰霊祭実施の趣旨を流し、協力を要請する。

イ、慰霊祭挙行の趣意書および寄付申込書を、役場を通じて各自治会に流し、自治会長さんのご協力を得て集金する。この場合、寄付の強制にならぬよう配慮する。

ウ、寄付金の目標額

④ 沖縄から見えるの方々に対する対応の方法

⑤ 委員長、副委員長、事務局長等の役員の決定

1995年8月3日

自治会長殿

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

委員長	下猶篤男		
副委員長	松田弘治	武田信雄	
委員	戎 倉男	岡山秀樹	川崎兼孝
	白尾春樹	永井和則	西迫雅子
	林 敏克	松田繁美	宮路義和

加治木港引揚死没者慰霊祭実施及び募金へのご協力依頼

今年の夏も昨年に劣らぬ異常の暑さでございますが、如何お過してございましょうか。突然のお願いを、しかも文書を通じまして致します失礼をお許し下さい。

今から50年前、1945（昭和20）年10月末から12月8日までの間、加治木は全国11カ所に設置されました引揚船入港地の一つでした。

南方諸地域、中国大陸等から、引揚船が加治木沖に続々と入港、復員軍人、一般邦人からなる引揚者は、木田新田地区の通称「三の水門」付近に設置された仮棧橋から上陸、加治木療養所（現在の南九州病院）や錦江小、始良町内の建昌小、帖佐小、重富小、船津小、山田小、帖佐青年学校などへ収容されました。その数は26、780名とされています。

この内、不幸にして加治木、始良町内の収容所で319名の方々が死没されています。そして、死没者の多くは、フィリピンのダバオから帰国した沖縄県出身の一般邦人でした。

加治木療養所や帖佐療養所に埋葬されていたこれら319名の引揚死没者の遺骨の中で、遺族により引き取られることの無かった約200体の遺骨は、加治木療養所で結核のために死没され療養所内の墓地に埋葬されていた方々の遺骨とともに、錦江小学校裏の吉祥寺墓地の一角に改葬されています。

去る6月23日、除幕した『平和の礎』建立のために、沖縄県が作成した調査資料によりますと、1945年10月末から12月始め迄の間に、加治木上陸後に死没した人と推定される人の数は130名で、130名の内、19才未満が100名で、この内、10才未満の子供が84名となっています。調査漏れも、まだたくさんあることかと思えます。

本年2月、沖縄県金武町の町長さんのご一行が加治木に見えました。その方々を通じて、加治木に沖縄県出身者を含む引揚死没者の墓があるという事実、これに加えて、本年10月末頃、心ある町民の方々の協力の下に慰霊祭を行いたいと願っている者共が加治木にいたることが、「沖縄タイムス」「琉球新報」の両紙により沖縄の人々に伝えられました。

この新聞記事により、今年5月、沖縄より比嘉貞子さんが加治木に見えられ、加治木町福祉課長の山口さんその外の方々のご案内で、前記の墓地を始め、関係の各所を回られた

ことは、南日本新聞でも報ぜられましたのでご承知のことと思います。

比嘉様より加治木への慰霊訪問と加治木町側の対応の状況を聞かれた全国組織「ダバオ会」沖縄支部（沖縄県内の会員1600名）の支部長の中村源照氏（沖縄ツーリスト株式会社専務取締役）からは、次のようなお便りを頂いています。

（前略）人生第2のスタート地点として一步を記した加治木町、且つ、一部には肉親を亡くされて、是非とも訪れてみたいと思いつつも、既に半世紀を経過した過去の記憶は乏しく、単独では探し当てる自信もなく、大方のダバオ会員がそのまま御無沙汰を致しているものと思います。（中略）小生としては、ダバオ会の世話人として、加治木町に関係ある在沖縄ダバオ会会員に対し、なんらかの方法でこのニュースをお伝えした上で、ご遺族のご同意を結集し、貴地を訪問致し、50年間ご無沙汰致しました法事でも執り行うことが出来たらと考えるものであります。（以下略）

戦後50年の長い歳月の間、遺族の方々にも、また、加治木の多くの人にもその墓の存在すら知られる事なく、何の叫び声をも挙げる事なく、加治木の地に眠ってきた人々の霊です。その慰霊祭は、加治木のより多くの人々のご協力とご参加、出来得れば、ご遺族の参加を得て実施してこそ、悲運の死者の冥福を祈る思い、平和を願う思いは、より深くより強くなり、意義あるものとなるのではないかと考えます。

このような考えで、引揚船の加治木入港50周年の日に当たる本年10月29日（日）、引揚死没者の慰霊祭を、菊の献花をする形式で、加治木町民、沖縄からのご遺族、その他の参加も得て、「魂」の一字のみを刻んだ自然石の墓前において執り行い、これに引き続き錦江小学校体育館で、当時を回顧する座談会を開催致す予定でございます。なお、墓域の一角に、この墓の由来を記した石塔も建立致したいと考えています。

しかしながら、何をすることも先立つものは金でございます。趣旨にご賛同頂きます町民各位から、百万円を目標に浄財に仰ぎたいと考えています。とは申しましても、詰まる所は、自治会長さん方のご協力を得なければ何もできません。

自治会内の回覧用の趣意書と寄付者芳名録を、8月末に貴殿の下へ役場の文書と一緒に送ります。貴自治会の皆様に趣旨をご理解頂き、ご寄付を仰ぎ、それを貴殿にお取りまとめ頂き、町福祉センター内の社会福祉協議会の窓口へ、9月末日迄に、寄付者芳名録を添えてお届け頂きたいのでございます。なお、領収書は、自治会ごと一括して発行することでお許し下さい。

甚だ勝手でございますが、以上の趣旨をご理解下さいますようご連絡申し上げ、慰霊祭を成功させるため、貴殿がご助勢下さいますよう委員一同衷心よりお願い申し上げます。

最後に当委員会の事務局は、川崎委員が担当致していますことを付記致します。

加治木港引揚死没者慰霊祭

1995年10月29日

加治木町吉祥寺墓地、錦江小学校

花 喜納 昌吉 作詞・作曲

川は流れて どこどこ行くの
人も流れて どこどこ行くの
そんな流れが つくころには
花として 花として 咲かせてあげたい
泣きなさい 笑いなさい
いつの日か いつの日か
花を咲かそうよ

涙流れて どこどこ行くの
愛も流れて どこどこ行くの
そんな流れを 此の胸に
花として 花として 迎えてあげたい
泣きなさい 笑いなさい
いつの日か いつの日か
花を咲かそうよ

花は花として 笑いもできる
人は人として 涙も流す
それが自然の 唄なのさ
心の中に 心の中に 花を咲かそうよ
泣きなさい 笑いなさい、※以下繰り返し
いついつまでも いついつまでも
花を咲かそうよ

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

加治木港引揚死没者慰霊祭と「加治木への引き揚げ」を語り、聞く会実施要領

- 1、慰霊祭 10月29日午前9時～10時 錦江小学校裏の吉祥寺墓地
慰霊祭式次第 司会進行（松田繁美委員）

- ① 開式の言葉（松田弘治副委員長）
② 追悼の辞
実行委員長殿（下猶篤男委員長） 加治木町長殿（代読、下楠蘭仁助役）
沖縄県知事大田昌秀殿（代読、永井和則委員）
子供代表殿（錦江小6年生迫村公志君）
遺族代表殿（中村源照ダバオ会沖縄県支部長）
③ 「墓碑由来記」の碑文紹介（林敏克委員）
④ 献花
実行委員長殿（下猶篤男委員長） 加治木町長殿（下楠蘭仁助役）
国立療養所南九州病院代表殿（小林廣幸事務部長）
子供代表殿（錦江小6年生森下沙織さん）
遺族代表殿（比嘉貞子殿）
この後に、沖縄からの参加者を先頭に、訪問者参加者全員が続く。
⑤ 閉式の言葉（武田信雄副委員長）※この後、急いで錦江小屋体へ会場

- 2、「加治木への引き揚げ」を語り、聞く会
10月29日午前10時10分～12時30分 錦江小体育館
語り、聞く会会順 司会進行（西迫雅子委員）

- ① 開会の言葉 川崎兼孝事務局長 約 5分
② 混声合唱団「コールのばら」による合唱 「花」などの三曲 約10分
③ 沖縄から見えた方々の代表者の挨拶 中村源照殿 約 5分
④ 琉球舞踊（「四竹踊」「谷茶前」）の披露
琉球舞踊「華豊の会」 金井すみ子、上原ルミ殿 約15分
⑤ 「加治木への引き揚げ」を語り、聞く会 約60分
沖縄からの話者
1. 敗戦後のフィリピンでの逃避行 島袋良夫殿
2. 引揚船の船上でのこと 玉城勤正殿
3. 加治木への上陸、収容所でのこと 桃原隆盛殿 比嘉貞子殿
4. 大分でのこと、沖縄へ帰郷のこと 仲間 勝殿
地元からの話者
1. 子供の目から見た引揚者 宮路義和委員
2. 収容所となった錦江国民学校 岡山秀樹委員
3. おにぎり作りに参加して 岩元博子さん
4. 遺体の埋葬にかかわって 戎 倉男委員
⑤ 閉会の言葉（白尾春樹委員） 約 5分

御 挨拶

朝早くから、遠くは沖縄県より、また、県内の各地より、そして加治木町内の各所より、私どもの呼びかけにお応えくださいます、「加治木港引揚死没者慰霊祭」および「『加治木への引き揚げ』を語り・聞く会」に、多数御出席くださいましたことに対して、厚く御礼申し上げます。

今年6月23日、沖縄で『平和の礎』の碑の除幕式のあった日に、実行委員会の準備会を開催、8月1日、第1回実行委員会を開催致しました。

以来、自治会長さん、班長さん方の手助けを得まして、加治木町民の皆様へ御寄付をお願いする傍ら、沖縄県平和推進課課長知念勇進様、ダバオ会沖縄県支部長中村源照様、加治木町当局及び関係部課、町教育委員会、町社会福祉協議会事務局の皆様、町PTA、町子供会関係の皆様、会場の錦江小学校の先生方、毎日新聞社情報サービスセンター様、中西石材様、サンモモアート様、長崎花屋様、竜門司焼協同組合様、「コールのばら」の皆様、マスコミ関係その他の皆様のご協力を得ながら準備を整え、本日を迎えることができました。

それなりに手立てをしたつもりではございますが、何分、初めての取り組み、きっと手落ちもございましょう。また、不特定多数の方々をお招きすることとございますので、計画通りに進行できなかつたり、不行き届きの点多々あることと思っております。不手際は何とぞお許しください。

資金として多額の御寄付を集め得まして、おかげで心のこもった慰霊祭を挙行できるようになりましたのも、ひとえに関係当局の皆様への深いご理解、町内外の多くの皆様方への厚情の賜物と、委員一同、感謝致しております。

「魂」の一字を刻んだ墓石の下に眠っておいでの、悲運薄幸の引揚死没者等の霊をお慰めし、あわせて「過去の戦争を見つめて、現在および未来の平和について考える」ことができますよう、皆様のご協力をお願い致します。

1995年10月29日

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

委員長	下猶篤男		
副委員長	松田弘治		
副委員長	武田信雄		
委員	戎 倉男	岡山秀樹	川崎兼孝
	白尾春樹	永井和則	西迫雅子
	林 敏克	松田繁美	宮路義和

追悼の辞

沖縄県よりお出でのご遺族の方々、加治木町当局、多くの加治木町民の皆様方のご臨席のもと、「魂」の一字のみを刻んだこの墓標のもとに、五十年間、静かに眠って来られた加治木港引揚死没者の皆様方に、実行委員会を代表して、追悼のことは捧げます。

昭和二十年、わが国の敗戦にともない、海外にいた多くの日本人は、引揚者として、故国に帰らなければなりませんでした。

あなた方が、加治木に上陸されたのは、同年十月末より十二月はじめまでの間で、その数は二万六千七百八十人にも上ります。この内、三百十九人と、三百四十二人ともいわれる多くの方々が、悲しくも加治木で死去されたのでございます。その多くが、フィリピンより引き揚げられた沖縄県出身の一般邦人の方々でした。

「上原ヒロ子、五歳。比嘉光枝、八歳。長浜正則、五歳。安里ミヨ子、六歳。嘉敷清憲、六歳。宮里久子、二歳。宮城勝治、一歳。高安ハル工、七歳。喜久山八重子、十一歳。比嘉正孝、六歳。高安清子、二歳。仲村清一、八歳。城間常広、三歳。知花春子、五歳」

以上は、このたび、沖縄県庁で発見された「加治木地区引き揚げ邦人死没者名簿」全二十二ページの中の、ある一ページに出てくる方々のお名前と年齢です。死没者の中に、いかに幼い人々が多かったか、戦争が、幼い人々にどんなに犠牲を強いたかを、この名簿は如実に語っています。

戦時中から、敗戦、引き揚げに至る迄の間、悲しく辛い体験を重ねられ、やっとの思いで加治木に上陸されたものの、栄養失調、マラリヤ、肺炎などの病気で死んで行かねばならない事をどんなに悔しく思われたかと推察いたしますとき、断腸の思いがいたします。

ましてや、多くの幼い子供の皆様方の死は、涙なくしては語ることができません。

五十年という長い年月を隔てて、今さらながらと恥ずかしい思いでございますが、死没された皆様方に対しまして、心より哀悼の誠を捧げ、とこしえに、やすらかに、おやすみくださいますよう、御祈念申し上げます。

悲惨な戦争の過去を振り返り、二度と同じあやまちをくり返さないようにすることが、皆様方が、その死という尊い犠牲を払って、私たちにお示しくださった教を生かすことになると思います。

そうすることが、たった一つ、日本人が、世界の人々、とりわけアジアの人々と、平和のうちに共存して行ける道だと思えます。

そのような思いから、この慰霊祭を挙行すべく、加治木町民の皆様方にご支援をお願いいたしましたところ、多額の御寄付をいただきました。沖縄県関係者、国立療養所南九州病院関係者よりも浄財をお寄せくださいますと、その総額は百九十万円を越えました。

なお、ここには、引揚死没者の皆様とともに、戦中、戦後のあの厳しい生活を余儀なくされた時代、結核のために死去され、やむを得ない事情のもと、加治木療養所内の墓地に葬られていらした方々の遺骨も納められていると伺います。これらの方々とて、戦争さえなければ、死なずに済まれた方も多かつたろうにと残念に思います。

今回の慰霊祭挙行を機会として、多くの方々が、ここにねむっておいでの皆様方の悲運の死を悼んでくださっているしとして、それぞれが、万感の思いを込めて記された寄付者名簿を捧げます。

関係者ご一同のご協力を報告いたしまして、重ねて死没者の皆様のご冥福を心よりお祈り申し上げ、実行委員長としての追悼の言葉といたします。

平成七年十月二十九日

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会委員長 下猶篤男

あいさつ

本日ここに、宇都宮町長、下猶実行委員長をはじめ、加治木町の皆様、沖縄からの御遺族及び関係者多数の列席のもと、加治木港引揚死没者慰霊祭が執り行われるに当たり、亡くなられた方々の御霊に対し、謹んで追悼の誠を捧げます。

顧みますと、去る大戦で、沖縄県は国内で唯一、一般住民を巻き込んだ熾烈な地上戦の場となり、二十万余の尊い生命が犠牲になったばかりでなく、かけがえのない貴重な文化遺産もことごとく消失しました。

戦争による被害は、沖縄だけではなくフィリピンやサイパン、テニヤンなどの太平洋の島々へ移住した多くの沖縄県出身者が、故里を遠く離れた地において、筆舌に尽くし難いほどの惨禍にみまわれ、多くの貴重な生命と財産を失いました。

また、戦火から生き延びたものの、これらの島々から引き揚げ、ここ鹿児島に上陸した直後に、栄養失調やマラリアなどにより、郷土沖縄に帰ることなく、幼い子どもやお年寄りなど多くの方々が亡くなりました。

肉親の安否を気遣い、戦争の結末を憂いつつ、犠牲となられた方々の心情に思いをいたすとき、私達は、唯々慰めの言葉を失い、限り無い無念の想いを禁じ得ません。

私たち沖縄県民は、敗戦後の廃墟の中から立ち上がり、戦後二十七年間に及び異民族の統治下でありとあらゆる苦難にも耐え、昭和四十七年の日本復帰後は、政府の特別な御配慮もあって、沖縄県は見違えるほどの復興を成し遂げました。

これも県民一人ひとりの努力もさることながら、国内外の多数の人々の暖かい御支援の賜であり、同時に戦争で犠牲となられた無数の方々の御加護のお陰であります。

それだけに私たちは、今日の平和と繁栄が戦没された方々の犠牲によってあがなわれたものに他ならないことを、片時も忘れることはありません。

沖縄県においては、毎年「全戦没者追悼式」を実施しております。特に、今年は戦後五十年周年の節目に当たり、六月二十三日の「慰霊の日」に、太平洋戦争・沖縄戦終結五十年記念の「沖縄全戦没者追悼式」を実施するとともに、国籍や軍人、非軍人を問わず、沖縄戦で亡くなられた二十三万四千百八十三人のすべての人々の氏名を刻んだ記念碑「平和の礎」を除幕したところであります。

この度、フィリピンをはじめ、南方の島々から加治木港に上陸した後、沖縄県出身者をはじめ亡くなられた多くの方々の慰霊祭が、地元加治木町の皆様の暖かいお心で執り行われますことは、誠に有難いことであり、厚く御礼申し上げます。

加治木町の皆様には、亡くなられた方々を手厚く葬っていただいた上に、毎年法要を営むなど、親身も及ばぬ程の御芳情をいただき、遺族ともども唯々感謝の念に堪えません。

ここに亡くなられた方々の御霊の御冥福と、とこしえに安らかならんことをお祈りいたします。

私たち沖縄県民は、戦争の悲惨さと平和の尊さを次の世代に正しく伝え、我が県をして世界の恒久平和を希求する発信地とするべく、県民の英知と総力を結集し、いかなる困難をも乗り越え、文化の薫りと活力に満ち、平和で潤いのある沖縄県づくりに邁進する決意であります。

終わりに、加治木町の皆様をはじめ、御列席の方々並びに御遺族の皆様方の御健勝を祈念いたしまして、ごあいさついたします。

平成七年十月二十九日

沖縄県知事 大田昌秀

慰霊祭の挙行、記念碑除幕式の挙行に際し、沖縄ダバオ会の皆様には、多くのご参加とご援助をいただきました。以下は、1995年10月29日の慰霊祭に寄せられた弔辞である。

弔いのことば

秋風の吹く此処加治木町吉祥寺墓地の墓前に於いて、下猶慰霊祭実行委員長様、川崎兼孝様、加治木町下楠園助役様を始め、多数のご来賓ご列席のもとに、戦後五十年の節目の年を迎え、此処に記念慰霊追悼式が斯くも盛大に執り行なわれますことは、ご参加下さいましたご遺族は勿論、私達ダバオ会にとっても、此の上ない慶びとするところであります。先ずもって、当慰霊祭実行委員の心暖まるこの度のご計画とご好意に対し、心よりの敬意と感謝を申し上げるものであります。

想い起こせば、昭和十九年の米軍のフィリピンへの反撃、日本軍の敗退は、私達自らの手と汗で築き上げた東洋の一大別天地とも言われたダバオを、想像を絶する悲惨な戦場と化してしまいました。数ヵ月に及ぶジャングルの中の逃避行から、やっとの思いで命を取り留め、ダリアンの収容所に辿り着いた時は、もう既に体力はその限界に達していました。

しかし、更に三ヵ月に亘る長い収容所生活を離れて、祖国日本へ帰れる引揚船に乗せられた時は、夢にも描き続けた母なる国日本へ帰れる喜びと嬉しさと更に新たな希望に胸を踊らせたことでしょう。

だが、引き揚げ当時の十月、十一月の寒さは、年中三十度を越える熱帯の赤道直下に生まれ育ったあなた方には、かつて体験したことのない厳しいものがありました。お世話下さった引揚者援護関係者の献身的な努力も空しく、また、当加治木町挙げての手厚い介添えの甲斐も無く、野辺の露と消えて行きました。

目と鼻の先の錦江湾につながら、沖縄に続く海を遥かに見つめて、無念の涙をじっと噛み締めながら死んで行かれたであろうと、皆様の当時の心境を察する時、今、此処に万感、胸張り砕ける思いが致し、お慰めの言葉もありません。

加治木町の皆様の格別なるご厚意により、斯うして沖縄から突然、六十三名が大挙参りましたがにも拘らず、ご鄭重なるご案内をいただき、かつて栈橋が掛けられていた上陸地点を始め、数々の収容施設跡等も懐かしい思いで、再確認することが出来ました。そして、此処に眠る皆様と五十年振りの対面を果たすことが出来、感激を新たにすることが出来ました。

何とぞ、由緒あるこの加治木の地に、静かにみ霊鎮まりまして、ご遺族並びに加治木町の発展のために幾久しいご加護を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、み霊のご冥福を心よりお祈り申し上げ、弔辞といたします。

平成七年十月二十九日

ダバオ会沖縄県支部長・沖縄ダバオ会加治木町慰霊団団長 中村源照

「加治木への引き揚げ」を語り・聞く会開会挨拶

昭和一桁生まれの私には、30年も前の日露戦争は、実感のない遠い遠い昔の戦争でした。

本日は、PTAや子供会を通じてお願いしまして、加治木の町の子供さん方の代表、その親の方々にも出席していただいておりますが、この若い方々からしますと、50年前の太平洋戦争は、私にとっての日露戦争以上に、遠い遠い昔の戦争だろうとおもいます。

私が日露戦争を遠い昔の戦争と考えて、自分に関係の無いことだと考えたとしても、過去は、厳しく現在に影響します。日露戦争以後、わが国は、武力で、海外に領土を拡大し、資源を確保するという国策を進めましたが、それがその後の日本人の生き方、それは同時に死に方までを決めたのでした。

国策遂行の結果は、敗戦という悲劇で終わり、国の内外で、多くの人々が尊い命を失いました。本日、慰霊を致しました三〇〇余名の方々も、その中のお一人お一人でした。

一口に、「戦後50年」と申しますが、50年という月日が流れたら、過去に根ざすままな問題が解決されるか、といいますが、そうとばかりは申せません。

そのことは、本日の慰霊祭に、追悼の辞をいただきました大田昌秀沖縄県知事を先頭に、沖縄の皆さんが、一丸となって、『人間の誇りと命の安全を守る、基地の無い沖縄』、それを包み込む平和な日本の実現を、本土の私たちに、世界の人々に強く訴えられていますことからおわかりいただけることでございます。

お手元の資料の表紙にあります『花』は、沖縄の喜納昌吉が作詞作曲した唄で、慰霊祭の中で流しました音楽でございます。50年前、せつかく加治木に上陸されたのに、この地で亡くなられた方々の中のほとんどは、お手元の資料にもありますように、人生を花に例えますと、蕾というにも、まだ幼い人々でした。

そして、その一人一人が、自ら花として咲こうと願い、また、花として咲かせたいと、周りの人々から願われていた人々でした。しかし、花として咲くこともなく、蕾のままに空しく散っていかねばならなかったのです。

私たちが、過去の戦争をしっかりと見つめ、人権と平和を確かなものにする努力をしていきますならば、死んだ人々は私たちの胸の中、心の中に生き返り、美しい花を咲かせてくれると思います。ぜひとも花を咲かせて上げようではございませんか。

そんな思いを込めて、この後、「コールのばら」の皆さんに、『花』その他の唄を歌っていただきます。同じく、鎮魂の願いを込めて、ふるさと沖縄の踊りを「華豊の会」の皆さんにご披露いただきます。

最後に、この会のメインでございます、『加治木への引き揚げ』を、9人の方々に語っていただきます。死んだ人々が、私たちの胸の中に生き返り、時には泣き、時には笑い、心の中に、花をいっぱい咲かせることができますよう、じっくりとお聞きください。

以上をお願いいたしまして、開会の言葉といたします。

1995年10月29日

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会事務局長

川崎兼孝

墓 碑 由 来 記

昭和二十年十月末より十二月初めにかけて、加治木は、南方諸地域、中国大陸からの引揚港とされた。別府川河口に近い木田新田地区海岸に、二万六千七百八十人が上陸した。

不幸にも三百十九人（三百四十二人ともいう）が上陸後、栄養失調およびマラリヤ等の病気で死没した。その大部分はフィリピンより帰国した沖縄県出身の一般邦人であり、またその殆どが十才未満の子供たちであった。

ここに葬られているのは、厚生省引揚援護局加治木出張所が置かれていた加治木療養所及び帖佐療養所構内に埋葬されていたこれら死没者のうち、やむを得ない事情で引き取られなかった二百有余人の遺骨である。昭和二十八年の十二月頃に、この地に改葬されたものと考えられる。

なお、加治木療養所で、戦中、戦後の窮迫の時期に、結核等で死没し、同療養所構内の墓地に葬られていた人々の遺骨も合わせて同時に改葬されていることを付記する。

引揚第一船入港50周年の本日、沖縄県より見えた遺族、多くの加治木町民の参加の下、引揚死没者の慰霊祭を挙行了。加治木町民、南九州病院関係者、沖縄県関係者から寄せられた多額の浄財をその資金に充てた。

墓碑の由来を後世に伝えるため、ここに石碑を建立し、その概略を誌す。

平成七年十月二十九日

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会
国立療養所南九州病院

上に示す『墓碑由来記』は、加治木町錦江小学校裏、吉祥寺墓地にある引揚死没者の自然石の墓碑の脇に、建立した石碑に刻んだものである。

『墓碑由来記』中の「三百十九人」という数字は、昭和二十二年一月末、局の閉鎖に際してまとめられた『鹿児島引揚援護局史』（鹿児島県立図書館所蔵）による。

また、（ ）内の「三百四十二人」という数字は、鹿児島県民生部が作成した『御遺骨伝達に至るまでの経過の概要』による。

別に、前記の『道県別遺体数表』には、「三百三十四人」という数字がある。

三つの数字のうち、「三百十九人」という数字が、引揚業務に直接参加した鹿児島引揚援護局の職員によってまとめられた記録に出てくる数字であり、引揚業務遂行の時期に、最も近い時期の数字であることを付記する。

なお、文中の「二百有余人」という数字は、昭和二十二年春、鹿児島引揚援護局閉鎖までに、遺族等に引き取られ遺体数を差し引いた数字で、前記『局史』による。

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会事務局長 川崎兼孝

1995年11月1日

沖縄県平和推進課課長知念勇進様

鹿児島県加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会
事務局長 川崎兼孝

慰霊祭終了についての御礼

拝啓、今日より11月、今年も残り少なくなり、心急がるこの頃です。ご当地沖縄では、「基地の無い沖縄」実現のために、大田知事を先頭に、県民一丸となってお尽力なされていますことに敬意と共感の意をお伝えいたします。

ところで、この10月29日、加治木への引揚第一船入港50周年の日に、加治木町吉祥寺墓地において、挙行いたしました「加治木港引揚死没者慰霊祭」には、沖縄より60名を越えるご遺族が参加していただきまして、当加治木町内よりも100名を越える人々が参加しまして、厳粛、かつ意義深く、慰霊祭及び「加治木への引き揚げ」を語り・聞く会を終了することができました。いろいろと至らぬところも多々あったことと思いますが、この度の慰霊祭挙行を機会に、加治木町民と沖縄の方々との心のつながりが深まったことは、間違いの無いことだと信じています。

思いますに、私が早期胃癌の手術で、北九州の病院に入院中、新聞紙上で、貴課を中心としてすすめられた「平和の礎」建立の事業を知り、貴課にお手紙を差し上げたときから、これまでの間、いろいろとお世話になりました。

おかげさまで、いつかはと思っていた慰霊祭や石碑の建立も、貴県関係者、加治木町民暖かいご支援を得まして、実現できたのですから、こんなありがたいことはありません。人間の善意を信じることのすばらしさを実感できて幸せに思っています。

墓所は、加治木町錦江小学校の後ろで、場所もはっきりいたしましたし、加治木町は鹿児島空港から、車で来ますと25分ぐらいの近い所ですので、御来鹿の節はお立ち寄りくださいますようお願いいたします。ご遺族の方々にもお出でいただきたいものと考えています。

慰霊祭実現に多大のご協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝申し上げますとともに、今後ますます加治木との交流を深めていただきますようお願いいたします。御礼の挨拶といたします。ほんの形ばかりで、失礼とも思いますが、ダバオ会沖縄県支部長の中村源照氏の便で、この度、加治木に来てくださった方々に差し上げました加治木名産の竜門司焼きの湯飲みをお届けいたしますのでご笑納くだされば幸いです。

今後一層のご活躍をお願い申し上げ、あわせて、知念様のご健勝を衷心より御祈念いたします。最後に、貴課職員の皆様によろしく御伝声ください。

敬具

1995年12月、同様の文と引揚死没者名簿を、沖縄を除く遺族の出身地、北海道、福島、新潟、富山、福井、山梨、長野、愛知、三重、滋賀、鳥取、島根、岡山、広島、山口、愛媛、福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島 の道県に送った。岡山、三重、熊本、新潟、宮崎、山口、山梨、愛知、長崎、大分県等から連絡を得て、遺族数人からお手紙をいただいた。また、加治木へ岡山、熊本県からご遺族が墓参に見えた。死没者が10人もいる福島県からの連絡が無かったのが残念であった。

北海道庁援護課長殿

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会事務局長 川崎兼孝

鹿児島県加治木での引揚死没者の遺族等関係者調査依頼の件

(前略) 鹿児島湾北岸に位置する加治木町は、1945年10月末より12月はじめにかけ、南方諸地域、中国大陸からの引揚船の入港地であって、26、780人が上陸しました。その内、ようやくの思いで帰国しながら、不幸にも故郷の地を踏む事なく、加治木で、栄養失調、マラリヤ、肺炎等で死去した人が、319(342人ともしう)人もいました。その大部分は、フィリピンのダバオから引き揚げて来た一般邦人(中略)でした。

沖縄県庁より入手しました「加治木地区に仮埋葬中の引揚死没者名簿」によりますと、貴道関係者も、別表にありますようにおいでの方です。同封の「加治木港引揚死没者慰霊祭」の資料、新聞記事のコピー等でもご理解いただけたと思いますが、引揚第一船入港50周年の本年10月29日、加治木吉祥寺墓地にある引揚死没者の遺骨を納めた「魂」の一字のみを刻んだ自然石の墓前で、沖縄県より見えた60余人の遺族、約140人の加治木町民の参加の下で慰霊祭を挙行了しました。そしてこれまで無縁墓同然で人に知られることのなかった墓塔の脇に、「墓碑由来記」の石塔を建立いたしました。

これらの事実を、貴道関係の遺族の方々にもお知らせしたくて、調査、連絡をお願いいたす次第でございます。なにしろ、50年前の、戦後の混乱の時期の事ですので、亡くなられた方の連絡先も不確かなものです。仮に正確であったとしても、その後の町村合併等で地名も変わっていることでしょうし、また、遺族の方々として同じ場所に住んでいらっしゃる可能性が高いと思います。

簡単には調査出来がたいこととは存じますが、異郷加治木の地で果てられた親、子、兄弟等の肉親の墓を捜しておいでの方の遺族が一人でもいらっしゃいましたら、墓の在りかななどを教えて差し上げたく存じます。

何とぞ、関係市町村とご連絡をお取りいただき、調査の上、その結果を当方へご連絡くださいますようお願い申し上げます。(後略)

平成7年9月4日

加治木町長 宇都宮明人殿

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

委員長 下猶篤男

仮称「引揚者上陸地の碑」建立のお願い

加治木への引揚船入港50周年に当たる本年10月29日、私どもが、引揚死没者の慰霊祭を計画し、挙行することに対しまして、町当局がいろいろとご支援、ご助力をいただいておりますことに対し、衷心より感謝いたしております。これも、ひとえに貴殿のご理解の深さに依るものと、委員一同ありがたく感じているところでございます。

既にご承知のように、昭和20年10月末の段階で、海外からの引揚船の入港地として指定されましたのは、鹿児島港など全国11カ所の港でございました。加治木は、鹿児島港が空襲の被害で使用不能のため、それに代わるものとして、昭和20年10月29日より同年12月8日まで、引揚港としての役割を果たしたのです。

この1ヵ月有余の間に、加治木に上陸した人の数は、26,780名とされています。この人々にとって、我が加治木町は、まさしく「人生第二の出発点」という役割を果たしたこととなります。

加治木町木田振興地区の海岸、通称「三の水門」付近の上陸地点に、上記記念碑が建立され、全国にこのことが報ぜられますと、加治木に上陸された方々やその関係者は、50年前のことを無量の感概をもって思い起こされ、その中には、加治木の町に杖を引かれる方もきっといらっしゃると思います。加治木町が、「過ぎた50年を振り返り、新たな未来を考える」ための情報発信基地の役を果たし、『鹿児島湾北岸に加治木町あり』ということ年全国にPRする絶好の機会かと考えます。

このことは、私どもが申すまでもなく、既に、加治木町「町興し」の一施策として、貴殿の胸中にあることとは思いますが、住民サイドからの意見として、ここに表明いたしまして、記念碑建立の具体化をお願いする次第でございます。

加治木町としても出費多端の折ではございまいしょうが、このような企画とその実現は、全国でも、加治木町を始めとするわずか十有余の市町村でこそできることでございます。

町民各位からの御寄付で、加治木港引揚死没者慰霊祭関係の費用をまかない、残金があれば（いくらになるかは今の段階では申せませんが）、それを上記の記念碑建立の資金の一部に供したいと考えていることを付記いたします。そのことは、趣旨から申しましても寄付していただいた方々のご了承を得られることと考えています。

1997年4月26日

委員各位

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

事務局長 川崎兼孝

仮称「引揚船入港地加治木」の記念碑建設に関する委員会開催の件

南国では、早くも日によっては初夏を思わせる暑い日もあるこの頃でございます。大変御無沙汰いたしてありますが、皆様にはお変わりございませんか。

ところで、早くより、上記記念碑の建立につきましては、加治木町当局に、適地をお世話くださるよう要請いたして参りました。この春、我委員のお働きかけもあり、先日、町長・助役合意の上で、下楠園助役より以下の如く、ご返事をいただきました。委員会として対応しなければならない事項と考えますので、ご多用とは思いますが、皆様にご参集の程をお願いいたします。

記

1、下楠園助役よりの返事

- (1) 南九州病院の東、旧10号線三差路より、加治木記念病院東側道路を南下、塩入須崎道路交差点を越えて、約100メートル南下した地点の左側道路沿い、木田1197-5、面積59㎡(17、9坪)、地目山林の開発公社所有地を斡旋する。
- (2) 当該地は、明神集落より道路建設のために開発公社が購入した土地の残地で、雑木が少し生え、中央部はやや小高くなっている。当該地には、元治元年(1864年)に建立された「塩竈宮 田之神 水神」と刻字された石塔塔身部一基が横たわっている。開発公社は明神集落より土地もこの石塔も合わせて購入している。
- (3) 当該地の購入価格は坪2万8000円で、総額約50万円であった。石塔もあることから、25万円から30万円位で売っても良い。無料で開発公社が提供するというわけには行かない。また、町が開発公社から買うことも議会にも掛けなければならず、現時点ではそれは考慮の内には無い。
- (4) 当該地の整備については、つつじを植える程度の協力はできる。

2、委員会開催要項

- (1) 日 時 5月12日(月) 午後1時30分
- (2) 場 所 塩入地区公民館
- (3) 現地視察 車に同乗して、現地へ
- (4) 協 議 今後の対処方に関して

※現時点における会計状況は、委員会で報告します。

1997年6月24日

委員の皆様方へ

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

事務局長 川崎兼孝

仮称「引揚船入港地加治木」の記念碑建設に関する委員会結果報告

5月12日午後1時30分より、塩入地区公民館で、上記案件に関して、久しぶりに委員会を開催致しました。出席者は、下猶委員長、武田副委員長、戎、宮路、岡山、永井、西迫の各委員、それに事務局の川崎の8名でした。

早速、役場が斡旋されている木田1197番地-5の加治木町開発公社所有地を現地で見分、その後、塩入地区公民館に帰り、論議致しました。

当該地の利点

- 1、この地の南に引揚者上陸地点である通称「三之水門」があり、将来、当該地の前を南に通ずる道路が海岸堤防まで延長されると、上陸地点に行くには便利である。

当該地の問題点

- 1、幕末の元治元年建立の石塔があり、これには『塩竈宮 田之神 水神』の刻字があり、ここに記念碑を建てるとなると、何とか手を加えて祭らざるを得なくなる。また、管理の関係で、仮に購入して記念碑を建てた後、町に寄付するとしても、この石塔と一緒に「政教分離の原則」からして、町に簡単には引き受けしてもらえないことも考えられる。
- 2、木が茂っているが、神を祭る場に生えている以上は「神木」という見方もあり、勝手に伐採して良いものかどうか、周囲が住宅地となるのは時間の問題なので、その木の管理に将来、苦勞をするのではないか。
- 3、記念碑建設地として利用するには開発公社より購入せねばならず、いずれ、町に寄贈する土地を寄付金の中より購入することは寄付者の気持ちを考えても納得しがたい。

以上の利点、問題点を勘案の上、この地に建立するには問題があるようだから、他に適地がなければ、旧塩入公民館敷地（現在はミニ公園のようになっている、そこには塩入地区で建立した『集いの場跡の碑』も建立され、管理は塩入地区でしている。町有地であり、助役との交渉で使用許可を得る見込みはある）に建立してはどうかと論議しました。

しかし、塩入地区に建てた後で、「何故、塩入に建てたのか」という町民の疑問によく答えられるだろうか、少なくとも、引揚者との接触が深く、今回の寄付でも多大の協力をしていたら、須崎地区住民の気持ちを考えると、「そんなことだったら、須崎で引き受けたのに」ということになる可能性もあるのではなからうかと考えました。

そこで、須崎地区内に適地はないのか、幸い、須崎地区では、現在、公民館建設の動きもあることから、新設される公民館敷地の一部にでも建立の可能性はないのか、そのことをある程度時間を制限して地元で検討してもらえないか、その結果を見て、万やむを得ないときに、塩入地区公民館跡地に建立することではどうだろうか、とにかく、須崎地区の意向を聞いてみて、その結果を見て結論を出すことにしました。

宮路、武田、永井の各委員からのお口添えもいただき、先日、須崎自治会の中村会長に、その旨をお伝えしました。8月に開催が予定されている須崎自治会の運営委員会に、川崎が出席して、これまでの経過を説明し、地区の意向を伺うところまで話が進んでいます。

いずれにしても、町が斡旋して下さった土地は、町にも都合があることだろうから、この際、お断わりしようと、委員会としては決定いたしました。過日、面談の機会を得ましたので、宇都宮町長、下楠園助役にその旨を伝えておきました。

以上、委員会の決定事項及びその後の経過をご報告致します。今年中には記念碑建立に決着を付けたいと考えています。今後もよろしくご支援の程、お願い致します。皆様方のご健勝を祈念いたします。なお、一月以上も報告が遅れましたことをお許し下さい。

【後日記】 上記文中にある須崎への記念碑建立は、須崎公民館の敷地が狭いため、実現が無理と判断し、最終的には次善の策として、現在地に建設することとした。

上陸地点にも近く多くの人の集まる場所で、最適の場所と考えた加治木町文化会館「加音ホール」敷地への建設は、たびたび交渉をしたが、残念ながら、遂に町当局の同意を得られず、断念せざるを得なかったことを付記する。 事務局長 川崎兼孝

加治木町民の皆様方へ

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会
委員長 下猶篤男

『引揚船入港の地 加治木』の碑除幕式のご案内

10月29日（木）午前10時より、塩入橋東側袂の小公園で、記念碑の除幕式を挙行致します。皆様方のご出席をお願い致します。

私たちが住む加治木町は、53年前、敗戦に伴う海外からの引揚船の入港地でした。収容所となった南九州病院や錦江小学校では、せつかく故国に上陸できたのに、懐かしい故郷の土を踏めないままに、病気や栄養失調で300余人の人々が死んでいきました。

私どもは、戦後50年に際し、この悲運の引揚死没者のために慰霊碑を建立、慰霊祭を行いたいと考え、その費用として皆様方に浄財の御寄付をお願いしました。沖縄県のご遺族からの分も含めて、二百万円を超えるお金が集まりました。

おかげさまで、1995年10月29日、吉祥寺墓地で慰霊祭を挙行、錦江小学校で『引き揚げについて語る会』も開催できました。町内はもとより、沖縄県からも、多くの皆様方御出席下さいました。

慰霊碑の建立・慰霊祭の挙行にお金を使いましたが、それでもお金が残りませんでした。そこで、加治木が、全国でも数少ない引揚船の入港地であったという歴史を後世に伝え、二度と引き揚げの悲劇を繰り返さないためには、アジア・太平洋諸地域の人々をはじめ、世界の人々との友好互惠共存の実現が大切であることを訴えるために、『引揚船入港の地 加治木』の記念碑を建立することとしました。

記念碑建立の場所として、上陸地点をはじめ、適地を物色して参りました。そして、この度、町当局の御好意で塩入川河畔の町有地（塩入橋東袂の小公園）の一部に建立する運びとなりました。ここに、経過の一端をお知らせします。皆様方のこれまでのご助力、ご協力に対しまして、委員一同心より感謝申し上げます。本当に有り難うございました。

『引揚船入港の地 加治木』の碑除幕式

1998年10月29日 引揚第一船入港の日

加治木町錦江町南塩入 塩入川河畔の小公園にて

主催 加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

《 記念碑碑文 》 原文は縦書きで、段落の一字下げはせず、句読点も省いてあります。

引揚船入港の地 加治木

加治木は、一九四五年十月二十九日より同年十二月八日迄の間、太平洋戦争の敗戦に伴うアジア・太平洋各地からの軍人・軍属及び一般邦人の引揚地であった。

翌年六月の一部上陸者を含めて、加治木に二万六千七百八十人が上陸した。その場所は、此处より西南方約一・五キロメートルにある三の水門の近くで、二度の台風で決壊していた錦江湾岸の堤防上であった。

戦後五十年に際し、上陸後、南九州病院や錦江小学校等の収容所で死去した三百有余の悲運の人々のために、吉祥寺墓地に慰霊碑を建立し慰霊祭を挙げるため、加治木町民に浄財の御寄付を願った処、沖縄県御遺族からの分も含めて、その総額は二百万円を超えた。

上陸地点その他の適地を検討したが、時間的経過も考慮し、此处に記念碑を建立し、加治木が引揚船入港の地であった歴史を永く後世に伝えるとともに、引き揚げの悲劇を二度と繰り返さないことを決意し、アジア・太平洋をはじめとして、世界の諸民族との友好互恵共存の実現を強く訴えるものである。

一九九八年十月二十九日 第一船入港の日に

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会

委員長 下猶篤男

副委員長 武田信雄 松田弘治

委員 戎倉男 岡山秀樹 川崎兼孝

白尾春樹 永井和則 西迫雅子

林敏克 松田繁美 宮路義和

1、除幕式

(1) 日時及び場所

10月29日 午前10時 記念碑建立の地（雨天の場合は塩入地区公民館）

(2) 神事及び式典（記念碑建立の場所で、10時開始、10時30分頃迄には終了）

※神事に先立って、碑を覆っている布をはずす。

ア、開式の辞 実行委員会委員 林 敏克

イ、神事

お祓い 降神の儀 祝詞奏上 玉串奉奠 昇神の儀

ウ、除幕を兼ねた記念碑文朗読 錦江小児童会役員

エ、式 辞 実行委員会委員長 下猶 篤男

オ、来賓祝辞

九州運輸局鹿児島海運支局監理課長 窪園 聡

鹿児島県国保援護課長 太田 尚人

加治木町助役 下楠園 仁

カ、中西石材様への花束贈呈 実行委員会委員 白尾 春樹

キ、閉式の辞 実行委員会委員 岡山 秀樹

敬称を省略
しますこと
をお許し下
さい。

《以上終了後、直ちに会場を隣接している塩入地区公民館へ移動》

2、「語り継ぐ『加治木への引き揚げ』」（1に続いて開催、遅くとも11時半には終了）

(1) 司会 実行委員会委員 西迫雅子委員

(2) 発言者

ア、沖縄県 沖縄ダバオ会 比嘉貞子 外に1、2名

イ、加治木町朝日町 竹山 洋子（手記代読、加治木中学校1年 郡山 知博）

ウ、始良町西餅田 向江 幸子（手記代読、加治木中学校2年 山下 真心）

エ、参加者の中から

3、直会を兼ねた昼食会（2の終了後、場所は同じく塩入地区公民館）

(1) 開会挨拶 実行委員会副委員長 武田 信雄

(2) 祝辞 沖縄ダバオ会 嘉陽 信子

(3) 祝電披露 実行委員会委員 松田 繁美

(4) 乾杯 町公民館連協会長 牧角 圭市

(5) 閉会挨拶 実行委員会委員 永井 和則

加治木町、加治木町社会福祉協議会及び加治木町商工会より、記念碑の建立を祝して、生花の御寄贈をしていただきました。ありがとうございます。

4、除幕式への招待者・参加者名簿

- | | | | | | |
|---------------------|----------|-------|-------|--|--|
| ◎ 神官 | 木場 政昭 | | | | |
| ◎ 官庁・病院関係 | | | | | |
| 九州運輸局鹿児島海運支局監理課長 | 窪園 聡 | | | | |
| 鹿児島県国保援護課長 | 太田 尚人 | | | | |
| 国立療養所南九州病院事務部長 | 加藤 清忠 | | | | |
| 加治木町助役 | 下楠園 仁 | | | | |
| 加治木町福祉課長 | 富永 貞義 | | | | |
| 町議会副議長 | 後藤 秀行 | | | | |
| 町社会福祉協議会事務局長 | 杉田 常広 | | | | |
| ◎ 沖縄ダバオ会関係 | | | | | |
| | 嘉陽 信子 | 大城八重子 | 伊波 米子 | | |
| | 比嘉 貞子 | 松田 澄子 | 稲嶺シゲ子 | | |
| | 高嶺 朝全 | | | | |
| ◎ 町各種団体関係 | | | | | |
| 公民館連絡協議会会長 | 牧角 圭市 | 副会長 | 蘭田 親治 | | |
| 自治会連絡協議会副会長 | 上村 直 | | | | |
| ◎ 学校関係 | | | | | |
| 加治木中校長 | 福元 紘爾 | | | | |
| 加治木中学校生徒 | 2年 山下 真心 | 1年 | 郡山 知博 | | |
| 錦江小校長 | 川原 高男 | | | | |
| 錦江小学校児童 | 6年 磯口 遥 | 宮路 芳史 | 新西 徹 | | |
| | 吉田 和希 | 浜川 桃子 | 小杉 寛子 | | |
| | 清水 政見 | | | | |
| ◎ 中西石材関係 | | | | | |
| ◎ 加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会 | | | | | |
| 委員長 | 下猶 篤男 | | | | |
| 副委員長 | 武田 信雄 | 松田 弘治 | | | |
| 委員 | 戎 倉男 | 岡山 秀樹 | 川崎 兼孝 | | |
| | 白尾 春樹 | 永井 和則 | 西迫 雅子 | | |
| | 林 敏克 | 松田 繁美 | 宮路 義和 | | |
| ◎ 塩入地区自治会長 | | | | | |
| | 岡山 三男 | 宝蔵 義秀 | 宝蔵 秋夫 | | |
| | 山下由美子 | 宮内 利治 | 川原 宏 | | |
| ◎ 塩入地区婦人部・PTA関係 | | | | | |
| | 美坂 妙子 | 谷村 佳 | 榎谷 美恵 | | |

敬称を省略しますこと
をお許し下さい。

式 辞

実行委員会を代表致しまして、一言、ご挨拶を申し上げます。

本日の式典には、ご多用の処、運輸省九州運輸局鹿児島海運支局、鹿児島県国保援護課、国立南九州病院、加治木町、加治木町議会、町内各種団体、小中学校、それに遠く沖縄県から、また、地元加治木町及び近隣より、志ある皆様方が多数ご出席下さいました。厚く御礼申し上げます。ここに『引揚船入港の地 加治木』の記念碑除幕式を盛大に挙行できますことを、委員一同、心より嬉しく且つ有難く思っております。

やっとの思いで故国にたどり着き、加治木に上陸されたにもかかわらず、郷里の土を踏む事なく、栄養失調や病気のため、加治木・始良の収容所で死没された三百有余の悲運の方々のために、戦後五〇年に際して、慰霊祭の挙行を企て、実行委員会の結成が呼びかけられたのは、平成七年、一九九五年の六月二三日、沖縄では『平和の礎（いしち）』が建立された日でした。

以来、町民の皆様方に浄財の御寄付を呼びかけました。おかげ様で、二百万円を越える寄付金が集まりました。そのお金で、三年前の今日、錦江小学校裏の吉祥寺墓地で、厳かに慰霊祭を挙行することができました。沖縄県より、沖縄ダバオ会に結集される多くの方々が、かつての自らの上陸の地であり、又、親兄弟の相果てた地でもあるここ加治木を訪れて下さり、慰霊祭に参加され、又、暖かいお心と多額の金銭をご寄せくださったことは、今も私どもの記憶に新しいところでございます。

私共は、慰霊祭挙行の後、残った寄付金を有意義に使うには、加治木が、太平洋戦争後、全国でも数少ない引揚船入港の地であったという歴史を、永く後世に伝え、二度と引き揚げの悲劇を繰り返さないように、多くの人々に訴えることだと考えました。そして、それを訴えるにふさわしい記念碑の建立を計画、それを建てるに適切な土地をさがしてまいりました。町当局のご理解・ご援助を得て、ここ塩入川の河畔を建立の地と定め、中西石材の掘留様始め、関係者のご尽力で、ご覧の通りの立派な記念碑の建立が実現できました。

本日は、来賓各位とともに、加治木、そして日本の未来を背負う若い人々を代表して、錦江小学校や加治木中学校の皆さんも参加して下さいました。この記念碑に籠められた願いを、どうかよく理解して、年老いた私どもはもちろんですが、未来のある若いあなた方が、アジア・太平洋をはじめとして、世界の多くの人々と、仲よく、助け合い、ともに栄えていけるように努力してくださることを強くお願いします。最後になりましたが、今日まで私ども実行委員会に寄せられました、皆様方のご厚情に深く感謝し、本日の式辞いたします。

一九九八年十月二十九日

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会委員長 下猶 篤男

挨拶

本日、ここに加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会の主催により、御遺族をはじめ関係者の方々御列席のもと、「引揚船入港の地 加治木」の碑の除幕式が行われるに当たりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

先の大戦が終わりを告げてから、早くも半世紀以上の歳月が過ぎ去りました。顧みますと、終戦直後の混乱の時期、戦災で使用困難となっておりました鹿児島港に代わり、引揚港として加治木港が使用されました約一カ月余りの間に、アジア・太平洋各地から二万六千人を超える方々が引揚者として上陸されました。しかし、悲しくも、そのうち幼い子どもたちをはじめとする三百人を超える人々が、栄養失調や流行病により尊い命を落とされており、こうした引揚者の方々の犠牲を含め、先の大戦では多くの尊い犠牲が払われております。

こうしたことから、三年前の慰霊碑建立に続きまして、引揚第一船入港の日に当たります本日、御遺族をはじめ関係者の御尽力により、永年の念願であったこの記念碑が立派に建立され、その除幕の日を迎えられたことは、誠に意義深く、感慨深いものがあります。さらに、この記念碑が、今後二十一世紀の次の世代へも末永く語り継がれ、心豊かな平和な社会の実現につながっていくことを念じてやみません。

郷土鹿児島も、県民の皆様の真摯な努力により、「うるおいと活力に満ちた鹿児島の創造」に向け着実な発展を続けているところであり、県としましても、今後とも豊かで平和な社会の建設に、一層努力してまいりたいと考えております。

終りに、関係者の御尽力に対し、深く感謝を申し上げますとともに、皆様の御健勝と御多幸をお祈り申し上げまして、あいさつといたします。

平成十年十月二十九日

鹿児島県知事

須賀龍郎

祝 辞

本日ここに、多くの皆様方のご参列を賜り、有志の主催によります「引揚船入港の地加治木」の記念碑除幕式を挙行せらるるに当たり、一言ご祝辞を申し上げます。

五十三年前、最初の引揚船が入港したこの祈念すべき日、ここに有志の皆様方の献身的なお力添えを賜り、尊い歴史を後世に伝える記念碑が建立されましたことは、誠に意義深いものがあり、実行委員会の皆様方に対し、衷心より敬意を表するものであります。

さて、「鹿児島援護局史」によりますと、加治木港には、昭和二十年十月二十九日の引揚第一便から十二月八日までの間、約七十隻が入港し、二万六千七百八十人が上陸されたとされております。そして、一般引揚者の大部分が、フィリピン・ダバオからの沖縄県出身者で、幼い子どもが多く、寒さと飢えのため、上陸後、非運の死を遂げられております。

戦後五十三年、我が国の繁栄は当時を顧みますと想像を絶するものがあり、私たちの郷土・加治木町も、戦災復興を経て、めざましい発展を遂げております。惜しむらくは、引揚者全員でこの喜びを分かち得ないことが、かえすがえすも残念でなりません。

しかしながら、今日の繁栄は、これら犠牲となられた方々の礎があったことを肝に銘じ、引き揚げの悲劇を二度と繰り返すことのないよう後世に語り継ぎ、平和な社会を築いてまいることが肝要と思います。

建立にご尽力賜りました関係各位に対し、深く敬意を表しまして、誠に簡単でございますが、私の祝辞といたします。

平成十年十月二十九日

加 治 木 町 長 宇 都 宮 明 人

新聞を見て寄せられた『加治木への引き揚げ』に関する手記

手を真っ赤にしての おにぎり作り

加治木町朝日町 竹山（旧姓林）洋子

昭和二十年、日々秋も深まる頃、当時、加治木高等女学校の新米教師だった私は、県からの要請に依ったものが、「須崎の療養所（今の南九州病院）に、炊き出しの加勢に行くように」との事で、生徒さん十名くらいと一緒に出かけた。

引揚船が須崎沖に入り、療養所が仮の収容所になっていた。堀っ立て小屋のような所で、海軍の、多分、厨房関係の下士官が指図して、引揚者の食事を作っていた。

私たちの仕事は、炊き上がったご飯を手を真っ赤にしながら、おにぎりを作ることだった。大きなもろぶたに数えて並べる。一個ずつ配るのだろう、大きなおにぎりは当時としては目を見張るような見事なものだった。終日、おにぎり専門である。

おかずは大きな平鍋で汁物を作り、時々、米軍放出の牛肉の缶詰が人数割で支給される。給食用のバケツで取りに来る人、空き缶に釣り手を付けた容器で受け取る人、さまざまである。女・子供がほとんどで、みんな疲れ果てた、浅黒い生気のない顔で、パナマ帽を巻いているので、南方からの引き揚げと察せられた。

男性には、旧海軍軍人らしい若者もかなりまじっていて、揃いの米軍支給のグリーンの作業着のようなものを身に着け、背中とズボンに、大きく「PW」と書かれていた。みんな寡黙に歩いていく。「生きて虜囚の辱めを受くるよりは…」という感じで、厨房の下士官達の目は一様に冷たかった。私たちは、陰で涙ながらに、この現実を見つめるばかりだった。

当時、引揚船で、やっとの思いで、故国日本の加治木という小さな町に上陸できたのに、ただそれだけで、命を落とす人が次々に出たと聞いた。療養所の火葬場の煙がいつも上がっていたように思う。

明るくて、おしゃべり好きで、よく働き、炊き出しの加勢をしたもんぺ姿の女学生も、今はもう老齢年金を受ける年頃になった。引き揚げて来た人も、戦災で焼け出された人も、苦しいながらもたくましく、この半世紀を乗り越えてきた。今後もほほどほどに頑張ってもらいたいと願う。

半世紀 経し戦災日 灸花 《灸花=やいとばな=ヘクソカズラの異名》

引揚船上で 加治木の収容所で 亡くなられた子供さん達に

始良町西餅田

向江幸子

当時、私は二十歳で、収容所となった加治木の国立病院とは別府川を隔てた対岸の十日町に住んでいました。父が病気でこの病院に入院していて、私は母の代わりに寝泊まりしながら看病をしていました。

私たちの病棟から少し離れて平行して建っていた棟に、沖縄や奄美大島行きの船の出るのを待っている引き揚げの方々が生きていました。勤めるにも勤められず、毎日をブラブラしながら暮らされ、それでも毎日の食物に追われている様子でした。

夜は食事の後、故郷を想い、大きな声で「安里屋（あさどや）ゆんた」を歌っていました。どことなく哀愁を帯びていて、聞いている私も涙が出てくるのです。みなさん、早く帰りたいという想いで一杯だったことでしょう。

最後に、引揚船の船上で、そして加治木の収容所で亡くなった子供さん達に捧げます。

本当にご苦労様でした。どうぞ安らかにお眠りください。

私はこの目で、あなた方の死顔とその体を見たのです。紫色になった体、紅葉の葉っぱのような小さな手のひら。

私の目の前を、今日は二、三人、明日は四、五人と、栄養失調と疲労のため、命を落とした幼い子、小学四年生ぐらいの子供たち。その体には、藁のこもが掛けられ、ゴロゴロと音をたてる大八車に乗せられ、援護局のおじさん達が、どこかへ運んで行くのです。

あなた方の父母は、戦前、フィリピンに渡り、死に物狂いで働き、やっと財産を築き、やれやれという時でした。戦争に負けたばかりに、それでも運のよい人は親と一緒に、中には親と死に別れ、生き別れになって、あなた方は、ここ加治木に上陸したのです。食べ物も無く、着るものも無く、ひもじく、寒い毎日だったことでしょう。

敗戦で、日本にいた私たちも、みんな同じような辛い目にあっていました。あなた方を慰めてあげたくても、慰めようがなかったのです。本当に済みません。許してください。

生きていたら、みなさんも初老の年、子供も孫もいる年頃です。どうぞ、この日本を、そして、あなた方がその足で踏むことのできなかつた故郷、奄美・沖縄に幸せが来るよう、御守りください。

下に示す文及び短歌は、加治木町老人クラブ連合の機関紙『百歳だより』第42号（平成10年12月15日発行）に掲載されたものである。関係者の了承を得て、ここに再録した。山下良子さんと松元幸子さんは御姉妹である。

「入港の碑」建立に寄せて

加治木町岩原西長寿会 山下良子

旧日本軍人と一般邦人の海外からの引揚上陸地近くの塩入に、去る十月二十九日、「引揚船入港の地 加治木」の碑が建立され、除幕式が行われました。五十余年、過ぎし日のことが今更の如く思い起こされ、遂にペンを取りました。

昭和二十年八月十五日、その終戦の日から間もない十月二十九日、引揚船第一便が加治木に入港しました。それに続いてフィリピンからの引揚船が入りました。殆どが婦女子で見るに忍びない栄養不足の身体に、肌着の上に毛布を巻いた着衣、裸足に近い履物で、まさに命からがらの引き揚げ、上陸された当時の気の毒な姿が今だに臉に焼き付いています。

当時、私は引揚援護局で引揚者名簿の整理を担当していました。第三便で、旧軍人が引き揚げ、上陸して参られました。その名簿の中に、フィリピンに従軍していた兄の所属する部隊の名が目にとまり、兄の名前を夢中で探しましたが見当たりません。隊長さんのお名前ははっきり記憶していましたので、兄の名前が無い筈はないのだがと、暗い予感におびえながら、二回、三回と目を通し、その日の仕事を早々に終え、引揚宿舎に隊長さんをお訪ねしました。しかし、一汽車前の便で、既に青森の故郷へ帰って行かれたとのことで、消息も知れず悔しい想いをしました。その後、隊長さんと連絡が取れ、八月五日の激戦の様と、兄がはかなく散った現地の地図を添えて、丁寧な御返事を頂きました。

近くの加治木港にフィリピンからの引揚船が入港し、しかも自分の息子の所属する部隊が上陸したのだから、いつかはこの港に我が子の姿をと、その日の来るのを信じて待っていた両親でした。その一途な願いも空しく、後十日で終戦だったのに、運命とは言え、一人息子を失った悲報は、あまりにもむごいショックでございました。

碑文には「引き揚げの悲劇を二度と繰り返すまい」と刻んであります。諸々の犠牲者の方々、心の片隅に、忌まわしい出来事を残したまま、世を去った両親などの胸中を察します時、本当に二度と繰り返してはいけないと痛感します。

碑の前に立ちすくみ、今の平和をつくづく有難いと思いました。碑建立に御尽力下さった皆様、ご苦労様でございました。厚くお礼申し上げます。記念碑建立に際し、愚文を寄せました。

二十代の自画像 兄の凜々しかり 在さば喜寿の 膳など囲まむ

松元幸子

加治木地区に仮埋葬中の引揚死没者名簿 (その1)

この名簿作成に当たり、原本とした上記同名の名簿（コピー）は、ダバオ会沖縄県支部中村源照氏等の尽力により、1995年10月、沖縄県生活福祉部援護課の好意で入手した。1953年12月、鹿児島県民生部世話課が沖縄県に送付したものの一部である。同名簿作成の時期は、1953年中で、沖縄県へ送付のために、引き揚げ当時の死没者名簿をもとに清書作成されたものと考えられる。

この名簿は、引揚船入港50周年の1995年10月29日、加治木町で挙行した「加治木港引揚死没者慰霊祭」の資料として作成配布した名簿にさらに手を入れたものである。

1、原本とした名簿は、本来、一冊の名簿であるが、埋葬地別に（その1）、（その2）に分けた。

表（その1）は、洲崎共同墓地（加治木町須崎集落内の共同墓地）および洲崎墓地（当時の加治木療養所、現在の国立療養所南九州病院構内の墓地）に仮埋葬されていた人々の名簿である。表（その2）は、帖佐療養所墓地（同療養所構内の墓地で、現在の始良町思川公園構内南部にあった墓地）に仮埋葬された人々の名簿である。

2、埋葬年月日、死亡年月日で、別段の記入のないものは、すぐ上に書かれている日に同じである。

3、原本では、本籍地、連絡先まで記入してあるものもあるが、プライバシー保護の見地から、道県のみを表記にとどめた。また、原本で村名のみ表記のものは、『昭和11年版 最新検定市町村名鑑』等によって所在道県を確かめた。

4、点線の囲みの内、及び（ ）中は、原本の中にある注、または川崎の施した注、あるいは川崎の推定を示す。

1996年1月6日（1999年2月再構成）

鹿児島県加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会事務局長 川崎兼孝

埋葬年月日	氏名	年齢	死亡日	出身地	
20-11-05	中島 安五郎	51	20-11-03	鳥取	中島～城間の8名の仮埋葬地は、洲崎共同墓地
	宮里 マツ	36	11-04	沖縄	
	田中 テイ	36	11-03	福岡	
	与那嶺 千工子	9	11-04	沖縄	
	平賀 直子	5	11-04	山梨	
	上原 昇	4	11-03	沖縄	
	島袋 典保	2	11-03	沖縄	
	城間 孝一	52	11-03	沖縄	(12-29、洲崎墓地へ改葬)
11-06	馬場 つき	5	11-06	不明	

	新垣	勇	8	11-06	不明	島場つき以下の仮埋葬地は、 洲崎墓地
	仲元	スミ子	1	11-11	不明	
	円治	喜一	42	11-07	福島	仲元～金柿の埋葬日は11・06 とあるが、誤記か
	平良	秀雄	2	11-08	北海道	
	金柿	トキ子	30	11-08	熊本	
11-10	長浜	善貞	4	11-10	沖縄	
	宜野座	英夫	2	11-11	沖縄	(「不明」とあるが、沖縄と推定 埋葬日11・10は誤記か)
	難波	慶子	1	11-09	福島	平～上原は埋葬日不明。死亡 日から見て、11・12以降か
11-10	屋宜	光子	5	11-10	沖縄	
	平	一比古	2	11-12	鹿児島	
	知念	勇	2	11-12	沖縄	
	仲間	マツ子	3	11-12	沖縄	
	上原	直友	5	11-11	沖縄	
11-15	我謝	孟守	認札	11-14	沖縄	
	仲田	正彦	3	11-15	沖縄	
	親川	ケイ子	7	11-15	沖縄	
	半沢	千四郎	3	11-15	福島	
	古波蔵	フミ子	13	11-14	沖縄	
11-16	上江田	ヨシ子	1	11-15	沖縄	
	安次嶺	ミエ子	5	11-16	沖縄	
11-17	稲峯	カツ子	2	11-12	沖縄	
11-18	坂本	哲雄	40	11-16	沖縄	
	野村	夏子	35	11-16	熊本	
	知念	カマ	37	11-16	沖縄	
	福地	キヨ	9	11-16	沖縄	
	坂本	龍雄	(無記入)		不明	
	坂本	正敬	9	11-16	熊本	
	中川	八重子	10	11-16	滋賀 (中川志津の娘か)	
	比嘉	民隆	4	11-16	沖縄	
	徳嶺	シゲ	9	11-16	熊本	
11-20	仲田	憲正	8	11-19	沖縄	
	宮城	勉	9	11-18	沖縄	
	久志	堅一郎	9	11-19	沖縄 (8月7日改葬)	
	比嘉	カナ	55	11-17	沖縄	
	国吉	真勇	3	11-20	沖縄	
	池原	貞子	6	11-18	沖縄	
	国吉	ミヨ子	4	11-20	沖縄	
	島袋	カツ子	2	11-19	沖縄	

	新垣 繁	12	11-19	沖縄
	新垣 静子	4	11-19	沖縄
	平良 ヨシエ	3	11-20	沖縄
	津嘉山 ナツエ	3	11-19	沖縄 (8月5日火葬警官立会)
	東恩納 勝	3	11-20	沖縄
	佐藤 泰紀	6	11-20	福島
(記入無し)	伊藝 タミ子	6	11-21	沖縄
(以下同じ)	前濱 エミ子	4	11-22	沖縄
	島袋 レイ子	6	11-21	沖縄
	新垣 千枝子	10	11-21	沖縄
11-22	当 銘 ヒサ子	10	11-21	沖縄
	当 銘 義男	2	11-21	沖縄
	喜久山 蒲戸	54	11-20	沖縄
	大城 栄子	9	11-20	沖縄
	又吉 千代	6	11-22	沖縄
	又吉 栄一	8	11-22	沖縄
	具志 ウト	40	11-22	沖縄
	上原 愛子	3	11-22	沖縄
11-24	宮里 文子	2	11-23	沖縄
	新垣 美代子	11	11-23	沖縄
	奥間 正子	10	11-24	沖縄
	中川 志津	49	11-23	滋賀 (中川八重子の母か)
	中 間 トヨ	47	11-23	沖縄
11-25	福原 隆章	8	11-25	沖縄
	宇 栄 タケ子	9	11-25	沖縄
	金城 博	18	11-25	沖縄
	新里 勝信	6	11-25	沖縄
11-27	仲 間 賢	16	11-25	沖縄
	長濱 善治	2	11-26	沖縄
	国吉 真善	3	11-25	沖縄
	大嶺 憲一	10	11-26	沖縄
	島袋 麻子	4	11-25	沖縄
	金城 吉彦	5	11-26	沖縄
	島袋 美代子	4	11-27	沖縄
	仲 地 シゲ子	3	11-26	沖縄 (8月8日、改葬)
	宇 栄 ヨシ子	13	11-27	沖縄
11-29	城 間 弘子	6	11-28	沖縄
	新垣 政利	7	11-28	沖縄
11-30	喜屋武 蒲	46	11-29	沖縄 (無記入だが、沖縄と推定)

	桃原正雄	5	11-29	沖縄
12-02	知花幸一	4	12-01	沖縄
	具志キヨ子	5	12-01	沖縄
	安里茂	1	12-01	沖縄
	新垣義夫	8	12-01	沖縄
	久高賢	3	11-30	沖縄
12-03	山入端久子	8	12-02	沖縄
12-04	平良昌子	5	12-02	沖縄
	比嘉常子	1 1	12-01	沖縄
	徳嶺清勝	1	12-02	沖縄 (無記入だが、沖縄と推定)
	大城久男	2	12-03	沖縄
	大越金重	4 7	12-03	福島
12-06	當真キク子	7	12-04	沖縄
	安次嶺キヨ子	6	12-05	沖縄
	當真嗣英	1 1	12-05	沖縄
12-08	宇栄スミ子	1 1	12-08	沖縄
12-10	諸見田正男	1	12-09	沖縄
12-11	田港義規	2	12-10	沖縄
12-13	當真嗣三	1	12-11	沖縄
	知念利江	5	12-12	沖縄
12-14	新里繁	1	12-13	沖縄
	天神重盛	4 0	12-09	宮崎
	諸見田照子	1	12-14	沖縄
	大城一男	3	12-13	沖縄
12-17	具志垣亀	5 2	12-16	沖縄
12-19	新垣錦	1	12-18	沖縄
	玉城松助	4 2	12-18	沖縄 (埋葬地不明中に同姓同名あり)
12-23	瀬長米子	3	12-21	沖縄
12-17	新城ウシ	4 7	不明	沖縄
	新城松雄	4 9	不明	沖縄
	赤嶺末子	1 2	11-30	沖縄
12-29	石田朝子	2 8		山口
	石田安光	7		山口 (石田朝子の息子か)
	飯崎品	5 5		愛媛 (愛知とあるが、都市名からして愛媛と推定)
	伊藤喜一	3 5	不明	愛知
	菅井ユキ	4 7	不明	福島
	竹松喜八郎	3 5	不明	長野
	後藤豊吉	5 3	不明	福島

	長嶺	薫	18	不明	沖縄 (改葬)
	中田	テイ	3	不明	不明、孤児
	永沢	実	12	不明	不明、孤児
21-01-08	金城	牛	60	21-01-07	沖縄
03-17	川畑	夕ケ	20	21-03-16	鹿児島
(記入無し)	(不)		(記入無し)		(記入無し)
(以下同じ)	新垣	照子	(以下同じ)		(以下同じ)
	米	正重			
	境	孝作			
	氏名不詳 (女)				
	" (女)				
	" (女)				
	城間	孝一	52	20-11-03	沖縄 (20-12-29、当地に改葬)

計128体 (ダブッテ書かれたものもあり、128体より多い)

加治木地区に仮埋葬中の引揚死没者名簿 (その2)

名簿 (その2) に出てくる人々の埋葬地は、すべて帖佐療養所、現在の始良町思川公園の構内南部にあった墓地である。

埋葬年月日	氏名	年齢	死亡期	出身地
(記入無し)	福ユキ	(年齢、死亡年	不明	加治木への引揚船の入港は昭和20年10月29日以降である。それ以前の死没者は海外または帰国途中の船内における死没となる。船内での死没者は水葬される。海外で死去し遺族がその遺骨を持参したのであれば、それを加治木に仮埋葬したとは考えられない。それに加治木地区つまり、帖佐療養所、加治木療養所構内の墓地に仮埋葬したのは遺体そのものであった。
(以下同じ)	濱田 泰生	月日記入なし。	不明	
	柳田 重信	以下同じ)	不明	
	大野 久子		鹿児島	
	山田 ミチ子		不明	
	西川路 イトエ		不明	
	増川 清一		不明	
	藤原 武治	13	20-08-19	
	山内 静夫	32	20-08-25	
	墓標のみ		不明	
	"		不明	
	"		不明	
	野村 正則	19	20-10-05	不明
	野口 直文		不明	不明

	江口	キク	28	11-18	不明	福ユキから井上栄までは、その姓を見るとき、二、三を除けば、鹿児島県内によくある姓である。その死没日が10月29日以前であること、療養所で病没した人を療養所構内の墓地に埋葬していた事実のあること等から考えて、これらの人々は海外からの引揚者ではなく帖佐療養所や加治木療養所に入院中に病没、病院内の墓地に埋葬されていた人々ではないかと考えられる。
	鮫島	逸治	28	11-25	不明	
	奥田	キク	34		不明	
	墓標のみ				不明	
	福崎	ツユ	39	09-09	不明	
	福崎	康蔵	37	09-11	不明	
	野間	久子	27	09-15	不明	
	墓標のみ				不明	
	河野	次郎			不明	
	井上	栄	不明	09-27	不明	
	山口	トシ子	9	11-12	不明	
20-11-12	新垣	百合子	13	11-12	不明	
	上原	蒲戸	57	11-11	沖縄	
	渡辺	ミツ子	5	11-11	熊本	
	宜野座	秀監	5	11-11	沖縄	
	大石根	ナヲ工	6	11-11	沖縄	
11-14	知念	富子	7	11-14	沖縄	
	坂本	次郎	8	11-13	熊本	
	小川	雪子	30	11-13	福井	
	上原	アキ子	11	11-14	沖縄	
	知花	道春	3	11-14	沖縄	
11-15	前田	ツギ	25	11-13	熊本	
	稲福	ミヨ	4	11-14	沖縄	
	山中	キヨノ	57	11-14	三重	
	比嘉	マス子	4	11-13	沖縄	
	上原	ハルミ	1	11-13	沖縄	
	仲間	宏進	2	11-11	沖縄	
	上原	シゲ子	69	11-13	沖縄	
11-05	伊波	スミ	34	11-04	沖縄	
	上原	サダ子	9	11-05	沖縄	
	上原	アキ子	2	11-04	沖縄	
	高安	勝子	2	11-05	沖縄	
	船津	南	6	11-05	佐賀	
	船津	伸一郎	4	11-04	佐賀	
11-05	玉城	常明	8	11-15	沖縄 (死亡月日と埋葬月日があわない)	
	伊庭	テル子	4	11-15	沖縄	
	川口	ヤス子	6	11-06	熊本	
	佐々木	宏	13	11-06	島根	
	大城	カズ工	8	11-06	沖縄	

	大井吉之丞	48	11-06	富山
	神津子力	42	11-06	長野
11-10	上原ヒデ子	9	11-08	沖繩
11-07	上原ミサ子	5	11-07	沖繩
	石川勝司	2	11-06	沖繩
11-10	又吉フミ子	9	11-08	沖繩
	徳本一宏	2	11-08	沖繩
	宮城勇昇	10	11-10	沖繩
11-17	比嘉和雄	50	11-14	沖繩
	宮里睦浦	(認入)	11-15	沖繩
	宮城リツ子	34	11-16	沖繩
	桃原八重	7	11-16	沖繩
	高良康一	6	11-16	沖繩
	仲間憲三	9	11-16	沖繩
	桃原明子	1	11-16	沖繩
	又吉世功	(認入)	11-15	沖繩
	与座カズ子	4	11-15	沖繩
	儀保一雄	5	11-17	沖繩
	伊豆味尚美	3	(認入)	沖繩
11-19	大城八ツ	25	11-19	沖繩
	玉城仁徳	8	11-19	沖繩
	玉城文隆	8	11-19	沖繩
	比嘉清子	10	11-19	沖繩
	比嘉イネ	3	11-19	沖繩
	田港朝晃	3	11-19	沖繩
	新里正則	2	11-19	沖繩
	比嘉節子	4	11-19	沖繩
11-29	比嘉和子	4	11-19	沖繩
	当間サチ子	4	11-19	沖繩
11-30	赤嶺勝男	4	11-30	沖繩
	国吉正子	1	11-30	沖繩
11-10	山城幸信	8	11-08	沖繩
	渡谷ナホミ	2	11-06	岡山
	堀野信治	4	11-07	熊本
11-20	上原重信	8	11-20	沖繩
	小林立一美	8	11-20	不明、孤児
	比嘉ヨシ子	6	11-20	沖繩
	樽谷敏雄	8	11-20	広島
	桃原吉信	4	11-20	沖繩

11-21	比嘉	嘉勇	5	11-20	沖繩
	嘉敷	トヨ	8	11-20	沖繩
	高良	工キ子	2	11-21	沖繩
	宜保	伸子	5	11-20	沖繩
	花城	ハルヨ	10	11-20	沖繩
	重村	俊子	4	11-20	山口
11-22	比嘉	弘治	7	11-21	沖繩
	古波蔵	トシエ	3	11-21	沖繩
	知花	カツ子	3	11-21	沖繩
	前田	シゲ	43	11-22	長崎
	山城	和子	6	11-13	沖繩
	水田	勲	6	11-13	大分
	宮里	一雄	5	11-22	沖繩
	国吉	真一	9	11-23	沖繩
	大城	勝三郎	2	11-24	沖繩
11-26	大仲	間カマ	48	11-25	沖繩
	徳嶺	勲	18	11-25	沖繩
	里	孝一	(研)	11-25	沖繩
	伊藝	サダ子	6	11-25	沖繩
	伊礼	八重子	3	11-25	沖繩
11-27	上原	カナ	39	11-25	沖繩
	金城	マサ子	6	11-24	沖繩
	久志	洋次郎	8	11-25	不明
	大城	亮子	5	11-24	沖繩
	徳本	アサ子	6	11-26	沖繩
	城間	貞夫	4	11-25	沖繩
	平安名	カツ子	1	11-23	沖繩
11-28	安里	みつ子	16	11-27	沖繩
	泉	エリ子	6	11-27	鹿児島
	小林	一三	5	11-27	新潟
	嘉敷	勝男	4	11-28	沖繩
	稲福	貞治	12	11-27	沖繩
11-30	比嘉	久雄	2	11-30	沖繩
	羽地	朝英	44	11-30	沖繩
12-02	内間	サ夕	41	12-01	沖繩
	大城	徳人	3	12-01	沖繩
12-03	内間	武久	6	12-02	沖繩
	上原	ヒロ子	5	12-02	沖繩
	比嘉	光枝	8	12-01	沖繩

12-02	長 浜 正 則	5	12-01	沖繩
	野 村 光 男	7	12-01	愛知
	安 里 ミヨ子	6	12-01	沖繩
12-03	嘉 数 清 憲	6	12-02	沖繩
12-07	宮 里 久 子	2	12-04	沖繩
	宮 城 勝 治	1	12-06	沖繩
	高 安 ハル工	7	12-06	沖繩
	喜久山 八重子	1 1	12-06	沖繩
	大 越 洋 一	7	12-04	福島
	比 嘉 正 孝	6	12-04	沖繩
	高 安 キヨ子	2	12-04	沖繩
	仲村渠 清 一	8	12-03	沖繩
12-04	船 津 松 子	3	12-03	佐賀 (船津 南、仲一郎の妹が縁者か)
12-07	江 島 道 明	8	12-07	佐賀
	本 多 普一郎	8	12-06	岡山 (普一郎は、晋一郎か)
12-04	小 林 シナ子	2 9	12-03	福岡
12-07	城 間 常 弘	3	12-08	沖繩
12-08	知 花 春 子	5	12-07	沖繩
	田 康 康 英	8	12-07	沖繩
12-10	古波蔵 義 夫	8	12-08	沖繩
20-12-07	長 嶺 シ ツ	4 5	20-12-07	沖繩
12-06	徳 嶺 ナイ子	7	12-04	沖繩
12-11	宮 里 育伯(嗣)	6	12-10	沖繩
12-11	喜久山 裕 俊	8	12-10	沖繩
12-11	平 良 実	2	12-11	沖繩
12-14	喜山カマの三女	1	12-10	不明 (死産)
12-11	仲宗根 蒲 太	5 1	12-11	沖繩
12-11	比 嘉 カズ子	1 1	(認入胤)	沖繩
12-13	照 屋 貢	1	12-11	沖繩
12-13	松 田 喜美子	8	12-12	沖繩
12-14	石 川 キヨ子	2	12-13	沖繩
12-14	比 嘉 英 子	5	12-13	沖繩
12-14	新 垣 修	5	12-15	沖繩
12-14	宜 志 富米子	7	12-13	沖繩
12-14	宮 城 寛 一	不明	12-13	沖繩
12-16	島 袋 子 ヨ	4 0	12-16	沖繩
12-16	田 中 ヤス子	3	12-16	沖繩
12-20	仲村渠 米 江	7	12-19	沖繩
12-19	神野藤 奈々子	6	12-18	福島

12-20	上原	信子	5	12-19	沖縄
12-24	中間	タミ子	11	12-23	沖縄
12-24	松堂	貞子	11	12-23	沖縄
12-28	比嘉	キヨ子	7	12-27	沖縄
12-28	比嘉	テル	10	12-27	沖縄
12-30	古波蔵	ウシヤ	33	12-30	沖縄
(翌日不明)	上原	勝子	2	12-31	沖縄
21-01-06	仲間	毅	8	21-01-04	沖縄
20-12-02	安里	ミヨ子	(不明)	20-11-28	沖縄
21-01-09	仲村渠	征男	3	21-01-07	沖縄
01-12	古波蔵	シヅエ	12	01-11	沖縄
01-15	平良	保盛	47	01-12	沖縄
01-15	宮里	米満	8	01-12	沖縄
01-17	高峰	フチ子	12	01-14	沖縄

計184体

加治木引揚民事務所作成の本件（引揚死没者関係資料を指す）資料から、引揚援護庁援護局が作成した資料『道県別遺体数表』には、各道県別の遺体数を次のように記している。沖縄は全体の68・9%を占めている。

北海道	1	福島	10	新潟	1	富山	1	福井	1
山梨	1	長野	3	愛知	2	三重	1	滋賀	2
鳥取	1	島根	1	岡山	2	広島	1	山口	3
愛媛	1	福岡	2	佐賀	4	長崎	2	熊本	8
大分	2	宮崎	1	鹿児島	3	沖縄	230	不明	50
総計								334	

昭和28(1953)年12月、鹿児島県民生部長の名で出されている『御遺骨伝達に至るまでの経過の概要』の各項の一部を紹介することで、「加治木地区に仮埋葬中の引揚死没者名簿」に記載されている方々の遺体及び遺骨が、その後、どのように取り扱われたかを以下に紹介する。

「」内は上記文書原文のまま、()内及び点線の囲み内の文章は、川寄が訂正、補足したものである。

一、外地よりの引揚の概要

「鹿児島市及び鹿児島港は壊滅的被爆により海外からの引揚者の受入れは非常に困難な事情にありました。そこで米軍の指令により、やむを得ず加治木町須崎海岸に引揚者を上陸させることに決定の上、急遽加治木引揚民事務所が設置せられ、終戦直後の九月二十九日、北大東島からの引揚第一船を迎え、昭和二十一年一月十日までの間に主として比島ダバオ等方面から2万7千名の引揚者を受け入れた。」

九月二十九日は、十月二十九日の誤記である。また、加治木への上陸は、昭和二十年十二月の初め迄と『鹿児島引揚援護局史』にある。

二、仮埋葬に至るまでの状況

「上陸の続いた日には、死没者一日五十名の多きに上ったとのことにて、悲惨を極めたようであります。その病名は栄養失調を主体に、兼発の麻疹、肺炎及び食物の変化に基づく下痢等となっておりますが、これらのご遺体は諸物資資材欠乏した当時としては(中略)ご遺族判明しないまま又は同伴のご遺族としても火葬施設なき関係もあり、拾骨を断念されたまま、仮埋葬された由であります。なお、同伴のご遺族、知人としては殆ど全員頭髪及び爪等を採取の上お持ち帰りになられ、その後来訪の上ご遺体の一部を発掘火葬して持ち帰られたご遺族もあるようでありますが、そのご遺族の氏名は判明していません。遠きご住所の多いご遺族としてはその後、ご来訪も殆どなく、敷地等の関係もあってやむを得ず二十二年春改葬されたのであります。」

引揚業務の一応の終了、これに伴う鹿児島引揚援護局の閉鎖に際して、帖佐、加治木両療養所構内の遺体を発掘、茶毘に付し、供養の後、その一部を鹿児島市の西本願寺に依託し、遺体埋葬地に供養の碑を建立したと、『鹿児島引揚援護局史』にある。上記文中の「二十二年春改葬」とはこのことを指すものである。ただし、遺体の数が余りにも多かったためか、すべてが発掘、改葬されたわけではなかったようである。

三、発掘、火葬、拾骨に至るまでの状況

「昨年（昭和27年）十一月、加治木、帖佐各療養所内に終戦直後の引揚邦人死没者のご遺体が埋葬されてあることを知り」

（県から厚生省にこのことが伝えられると、厚生省引揚援護庁から）

「この十一月（昭和28年）初め、これらのご遺体処理を正式に当県に依託せられ世話課が発掘、火葬、供養等に任ずる事になった次第です。世話課としては、十一月二十五日、先ず墓前にて関係者、有志及び作業実施者等多数参列の下に仏式供養を営み、次いで発掘作業に従事し、湧水のため難渋しましたが、二十九日発掘完了、些かの骨片も残さざるよう収骨を終わり、整地の上、帖佐は二十八日、加治木は二十九日神式による清祓の式を行いました。その間、帖佐の埋葬現場には火葬施設がない関係上、逐次ご遺体は納棺し霊柩車にて鹿児島市火葬場に護送いたしました。夫々茶毘に付し、拾骨した分は逐次鹿児島市及び加治木町のお寺に安置し、毎夜供養を行い、火葬終了と共に名簿を点検しつつ、白木の小箱に改めて収納し、この八日、漸く作業を終わった次第であります。」

四、国、県共催の追悼式の挙行について

「加治木、帖佐地区引揚死没者三百四十二柱の霊を慰めるため、引揚援護庁鹿児島県共催の下に、引揚援護庁長官、鹿児島県知事その他ご遺族を中心に、官公衙、各界各団体及び旧引揚民事務所長以下、往時の関係者多数参集の上、十二月十九日午前、鹿児島市中央公民館において厳粛、盛大裡に追悼式を実施することになった次第であります。」

五、御遺骨の伝達について

「追悼式参列のご遺族には式終了後御遺骨を伝達致しますが、一般のご遺族には琉球政府及び都道府県世話課又は市町村役場を経由してご受納されることとなります。（以下 省略）」

敗戦後の加治木地区への引揚死没者のうち、やむを得ない事情により、遺族とともに故郷に帰ることの出来なかった遺骨は、上記にあるような措置の後、三の項にあるように、白木の小箱に収納され、昭和28（1953）年12月頃に、全国各地の遺族の下に届けられた。しかし、三百体を越す大量の遺骨のこと、遺族の下に届けた残りの遺骨は、その頃と思うが、加治木町錦江小学校裏の吉祥寺墓地の一角に建立された「魂」の一字を刻した自然石の墓塔の下に葬られた。

1995年10月29日、この墓碑の前で死没50周年の慰霊祭を挙行了。沖縄から六十名を越す遺族関係者が、加治木町内から百三十名を越す有志が参加した。

慰霊祭挙行之趣旨に賛同した多くの加治木町民、沖縄県関係者から寄せられた浄財は二百万円を越えた。

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会事務局長 川崎兼孝

『加治木への引き揚げ』を知る手がかりとして

1、『鹿児島引揚援護局史』（県立図書館所蔵）の「はしがき」（『局史』P3～7）

引揚援護の事業は、終戦直後の緊急施策として実施せられた。即ち戦争終了と共に、在外軍隊の内地復員と海外同胞の引き揚げは、連合軍の国内進駐に続いて行われ、早くも激戦のあった南方の島々の生き残りの将兵や親を失った子が失った同胞が先ず引き揚げて来た。続いて大陸ならびに南方より、大量に引き揚げが行われる情勢にあった。

厚生省は、連合軍総司令部の指令に基づき、引揚者の引揚援護対策を実施することになり、取りあえず引揚港関連府県をしてこの施策を行わしむることに通牒したが、当時、陸海軍引揚復員軍人は陸海軍のそれぞれの機関に於いて受入れを為し、府県庁は一般邦人のみの受入れを為したので、引揚港に於ける検疫・誘導・給養及び輸送等の業務は夫々の手で行われた関係上、統一ある業務の遂行は期待し得られない点もあったので、20年10月15日に、連合軍総司令部は日本政府に対し、単一なる機関に依り統括せらるる受入事務所の設置方を指令し、同時に11カ所の引揚港を指定してきた。

鹿児島港は、これにより引揚港の一つとして指令されたのであったが、鹿児島市は戦災に依り9割5分の市街を焼失していたので、引揚港として指定せられても必要な施設が無いので、厚生省はこれを他に変更するよう、連合軍総司令部に申し入れを為したのであった。既にして、鹿児島県は厚生省の前述の通牒並びに鹿児島市駐屯占領軍軍政官の命令に依り、在加治木日本医療団加治木療養所を利用して引揚民収容所とし、復員省関係機関も又、ここに設けられたので、その施設並びに地位極めて適当ならざるままに、取りあえずここにおいて引揚援護業務を開始することにした。

そして早くも20年10月29日には、北大東島から第一船が入港してきた。然るに、11月に入ると、占領軍軍政官から鹿児島港に於いても引揚者を上陸せしむると言うので、鹿児島県に対し1万数千人を収容し得る宿舍の緊急整備方を命令してきた。県は焼け残り学校、工場又は焼けビルデングに応急の施設を為しその要請に応えたのであった。占領軍軍政官に於いても、この仕事に必要な物資として軍需物資を充てることにし、その集積に特別の援助をして来たのであった。

以上の如く、現地の諸施策が急速に実施されつつあり、一方、在鹿児島米軍引揚監督官に於いても、鹿児島港は風光明媚、気候温暖で且つ天然の良港であること、南方にもっとも近いこと、又、既にこの為の占領軍兵力の配置完了したるを以て、他に変更せんとする

意向も無かったので、厚生省はここに鹿児島港を引揚港として使用し、引揚援護局を設置することに決し、20年12月初旬より鹿児島引揚援護局の組織に着手し、21年1月10日から業務を開始したのである。そして局には総務部・業務部・検疫所を設ける外、上陸地支局員を以て第一復員部、上陸地連絡所員を以て第二復員部を編成し、従来、鹿児島県、上陸地支局、上陸地連絡所に於いて担当してきた業務の引継ぎを受け、鹿児島引揚援護局の名の下に、統一ある業務の運営を図ることになった。

斯くして鹿児島引揚援護局の活動は開始された。

外地に於ける其の国人の動きや食糧、医薬品等の窮乏等に依り、急速に引き揚げを完了することが必要であったので、政府は米国船の貸与を受けたりして引揚船舶も増し、鹿児島港にも引揚船が次から次へと入港してきた。これに応じて局職員も整備し、施設の完備も急いだ。局員は夜を徹して作業を続けた。そして日曜・祭日もなく、又、寝食を為す暇も無い繁忙さを経験した。特にコレラ・発疹チフス・天然痘等の発生した時は生命の危険すら感ずる程の活動もしなければならなかった。このような状態が8月の始めまで続いた。

惟つに、引揚援護の仕事程、心を痛ましめ涙の出るものはない。

戦地を馳駆した将兵が、戦塵にまみれ、疲労の色を見せながら、故国上陸の第一歩を力強く踏みしめて、我等が祖国なりと喜ぶのを見た。病癒えずして、白衣のまま横たわりて呻吟しながら、故国の山河に微笑を投げ掛けるのを見た。

又、永い間、海外に活躍して相当の地盤と勢力を持っても、今は着のみ着のままで引き揚げて来た人も、又、戦争の渦中に、又は引き揚げの最中に親兄弟を失い、或いは別れ別れになった人もいた。それらの人々は等しく幾多の困苦艱難を経験し、疲労傷心の身であったが、故国の山河尚変わらざるを見て、ひたすら故国へたどり着いたことを喜ぶのであった。然し中には、疲労困憊の身を上陸後直ちに病院に運ばれ、親しい者の名を呼びながら唯々国に帰り得たことに満足して、最後の息を引き取る不幸な人達もあった。特に病の床にある幼い児達の、親を呼びながら呻吟する有様、そして次から次へと冷たい骸となって行くのはこの世の状態ではなかった。

引揚者の群れは、すし詰めになった引揚列車に乗って、敗戦後社会混乱の中を縫うて、住宅難、食糧難、就職難の故郷、又は廃墟と化した故山へ、親兄弟、親類、知己を頼りと急ぐのである。かくの如きは、日本の歴史に嘗て見ない悲痛極まり無き情景である。

我が鹿児島引揚援護局員は、出来るだけ温かく且つ親切に迎えること、そして夫々の地に出発するに当たり、この親切が引揚者の心の慰めとなり、ひいては日本再建の希望を抱かせることになれかしと願って仕事をした。そして我が鹿児島引揚援護局の施設は他の局に比して悪いが、せめて親切に取り扱うという点に於いて、日本一にしようと心の贈物を惜しまなかった。かくの如くにして、引揚者の受入れは8月初旬で一段落を告げたのであった。

次に沖縄、奄美大島等南西諸島民の送還である。これ等島民の送還は種々な理由で、21年3月18日を以て、連合軍総司令部に依り一時停止を命ぜられた。

元来、鹿児島は沖縄・奄美大島とは地理的・経済的・社会的にも昔から特殊な関係があるので、他の港に上陸した引揚民も復員者も、戦時中内地に疎開した人達も、或いは戦時勤労働員で内地の軍需工場に働きに来た人達も、鹿児島に行けば、やがては故郷の島に帰り得るものと思つて自然に集中してきた。引揚者は本局の宿舍に収容していたが、長く滞留せざるを得なくなり、宿舍に入れない人達は鹿児島市の知人のもとに、県の宿泊施設に、その不可能な人達は焼け跡又は防空壕に仮の宿を作って、送還が許されるべき日を待つのであった。

これ等の人達は、所持金を費い果し、僅かの家財さえも売り払つて露命を繋ぐが、一時的にも商売を始めて生活をたてねばならなかつた。ここに新しい社会問題が生まれた。本局はこれ等の人々の送還が遂に許可せらるるよう、厚生省並びに連合軍総司令部に要請した。漸く7月下旬になり、3月18日に行われた非日本人登録の結果に依つて集められた統計に基づいて、連合軍総司令部から南西諸島民の送出計画が決定され、鹿児島より8月中旬から毎週沖縄1,000名、奄美大島600名宛て送出することになった。

然るに送還は開始されたが、鹿児島市内に集中した奄美大島の人達は余りにも多く、送還定員1週六百名の中に加えらるるだけにては、到底それ等の人々の満足に値いするものではなかつた。殊に押し寄せる生活の脅威は、愈々それ等の人々を急速大量に送還するよう熾烈に要求してきた。本局もその事態の深刻なるに鑑み、県・市と協力し厚生省並びに連合軍総司令部に、奄美大島行配船の増加方を要請したが容易に許可されなかつたが、10月1日の再登録に依る結果に基づいて、11月から南西諸島民の送出定員3,200名中、奄美大島分2,200名に増加したので、やっと安堵の胸を撫でおろした。

そして計画通り送出し得たが、11月中旬になると計画通りの数は集結せず、次第に減少してきた。反対に定員通り集めるのに苦心をせねばならぬことになったが、兎に角、12月28日を最後として、南西諸島民の送還は終了、ここに本局業務は結末を告げるに至つた。

惟えば、南西諸島の人々が故郷の島々に帰りを急いだことも無理の無いことであつた。それ等の人々には、引揚者、復員者、終戦に伴い職場を失つた人、戦争のため島から内地に疎開した学童や老人婦女子であつて、如何に荒廃した故郷なりとしても、早く帰つて郷土の復興、生活の再建を企てんとする人々で、尚、食糧不足、物資騰貴の内地の生活に、永い間、戦争以上の苦難を嘗めた人々であつた。

これ等の人々は、連合軍の占領下にある島々に帰るのであるが、送還の業務は引揚者の受入れ以上に苦勞の多い仕事で、局員は引揚船から上陸する人々に対すると同様に、温かく且つ親切に送らんことを願つた。そして内地の同胞が捧げんとする同胞愛を代わつて捧

げ、春回り来たならば日本再建のため、喜んで手を握るの日を速やかに待望せんとするのであった。

以上の如く、鹿児島引揚援護局の業務は、21年末、最後の南西諸島民の送還を以て終了したので、連合軍総司令部の指令に依り、22年1月末を以て閉鎖することになったのである。(中略)

今、本局の取扱数を述べれば、引揚者数360、924名、送還者数57、298名、合計418、232名である。又、この間に支出した経費は20年度、1、490万円、21年度、2、789万円、合計4、280万円であり、その中、工事費は1、000余万円である。局員は雇傭人合わせ一時1、500名であったが、閉局時は700名である。

更に又、1カ年有余の間に於いて、又、閉局に当たり、鹿児島のため直接間接に為し得た点は次の如きものがある。

第一に、鹿児島島の港の名と湾内の極めて景色に富むことを引揚者を通じて日本全国に広めたこと、占領軍将兵と米国全土に広めたことである。

第二には、鹿児島港は3千吨級の接岸を目標として築造せられたが、占領軍港湾監督官と船舶運営会の努力により、1万屯級の引揚船舶を接岸し得て、その重要度と将来の希望を驚異的に高めたことである。

第三に、本局の活動、引揚者の来往に伴い相当額の金が地元散布され、物価騰貴の傾向を助長した点もあるが、地元の復興に何等かの寄与することもあったと思う点である。

第四に、21年夏秋にかけて県下に発生したコレラ、天然痘、発疹子フスの流行に対し、本局検疫所に於いてその全能力を挙げて細菌検索に従事し、且つ防疫に協力した点である。

第五に1千万円以上の経費を投じて建設したる建物と集積したる物資、資材の一部を地元に残し得ることになったが、これはやがては学校の復興、延いては文化の復興、医療衛生、防疫機関の復興、港湾施設の充実、援護施設の充実に寄与することと思うことである。

回顧すれば、誠に感慨無量、ここに協力と指導を賜った県・市並びに関係各位に対し、重ねて感謝の意を表す。又、1カ年有、同労同苦、真剣に敢闘したる局員各位に対して感謝の意を表す。最後に乞い願うことは、引揚者の人々が生活の復興がなり、希望と努力が生まれるように、又、今日を以て袂を分かちて各々の方向に分かれて行く局員の前途に幸多かれと祈るのである。又、日本最南端の港湾都市鹿児島市が復興なり、弥栄に栄え増さんことを祈る次第である。

昭和22年1月30日 閉局式に際して

鹿児島引揚援護局次長 三澤房太郎

《補注》『加治木・鹿児島への引揚』を知るに格好の資料として、直接、引き揚げの業務に携わった人でなければ書けないこの文を、長文ながら取って引用した。

2、加治木事務所設置（『局史』P18）

10月28日、外地引揚民加治木事務所を設置し、機構を陸軍部・海軍部・一般部に分かち（以下略）。

3、加治木港に第一船入港（『局史』P18）

10月29日朝、北大東島から海防艦198号が復員者を乗せて入港し、次に比島方面からの入港が続いた。その内、相当多数を占めた沖縄県人は、沖縄向けの送出船の出発まで滞留することになった為、収容所の増設が必要となり、11月7日より加治木錦江国民学校、帖佐建昌校、帖佐青年校、帖佐国民校、重富国民校、重富船津校、山田国民校の各学校々舎の一部を収容所に使用することにした。引揚者の食糧・寝具・被服・医薬品等は連合軍の接収した軍需物資を軍政官の許可を受け、各地より運搬、これを使用した。患者の収容は元霧島海軍病院・帖佐療養所・重富教員保養所並びに加治木収容所内患者収容室を使用した。

加治木港に揚陸した比島方面からの引揚者中には、栄養失調症、マラリヤ、疥癬等殊に多く、患者の収容・医療には医者・看護婦・保健婦を動員、大いに努力したが、11月には264名の死亡者を出し、12月には鹿児島地区の4名を含み121名の死亡者を出すに至った。（以後は患者も死亡者も激減した。）

なお、引揚者中の無縁故の孤児は、重富教員保養所の一部を充当、収容保護することとした。12月21日には、台湾省民の送出を開始した。

《補注》文中にある「加治木港」とは、現在の加治木港ではない。引揚者の上陸地点は、加治木町木田地区錦江湾沿岸の「三の水門」の近くで、昭和20年9月の枕崎台風、10月の阿久根台風の二度にわたる台風で決壊された海岸堤防の基礎の部分であった。今回、記念碑を建立する地より、南西約1、5キロメートルの位置に当たる。

4、引揚概況（『局史』P19）

引揚人員は、昭和20年10月、806名、11月、18、566名、12月、25、325名（以下略）。

《補注》加治木への上陸は12月8日までであるから、12月分の、25、325名のすべてが加治木に上陸したわけではない。

5、占領軍との関係（『局史』P23～24）

昭和20年10月28日、即ち加治木港に引揚船第一船入港前日、占領軍よりウエイド少尉以下1個小隊、同じくC・I・Cウッド少尉以下3名が引揚者の受入収容所とした加治木療養所に駐屯し、当初は占領軍の直接指揮によって、引揚者の受入・検疫・誘導・訊問等の業務が行われたが、加治木事務所の陣容強化に伴い、占領軍は業務の監督指示を行い、業務は事務所に委任するように漸次移行した（以下略）。

6、残務整理（『局史』P29）

（前略）閉局に当たり、ここに記述を忘れることができないのは、加治木地区に於いて、上陸後、療養の甲斐なく不幸死没された屍体は、付近に仮埋葬の上、遺族の引き取りを待ったのであるが、大部分は閉局時に至るまで、引き取り者無く、その屍体数200体以上のぼった。1月末《補注、22年》、この屍体を茶毘に付し、遺骨は分骨し、西本願寺に委託することにした。後の遺骨は合同埋葬し、慰霊祭を行い、供養塔を建て、これ等不幸な人々の冥福を祈った。

7、引揚船舶の概況（『局史』P52）

昭和20年10月29日、北大東島より復員者295名を乗せたC・D198号が加治木港に入港したのを嚆矢として、昭和21年12月末日までに入港した船舶数は495隻で、うち468隻（94・5%）が日本の艦船で、他の27隻（5・5%）はL・S・Tその他外国船であった。（後略）

《補注》「C・D」とは海防艦を指す。引揚船には、旧日本海軍の生き残りの艦船も利用された。

8、引揚者の概況（『局史』P53）

当地方への引き揚げは、前述のように、最初、加治木港で実施せられ、昭和20年10月29日、北大東島からの復員者295名を乗せた海防艦198号を第一船として、12月8日の上海からの一般人2、184名を乗せて入港した明優丸を最後に（尤も6月に発疹チフスの隔離の関係上、花月、米山丸の2隻が加治木に揚陸したが）、爾後は殆ど鹿児島港に上陸した。

当地方への上陸総人員は360、924名で、この中、加治木港は26、780名（7%）、鹿児島港は334、124名（93%）であった。（中略）

次に陸、海、民別に見れば、陸軍205、140名（56・8%）、海軍25、704名（7・1%）、民130、180名（36・1%）で、方面別に見ると、華中140、493名（38・8%）、台湾140、185名（28・9%）、華南28、789名（7・9%）、仏印20、956名（5・7%）で、最小はスマトラからの5名であった。

《補注》20年10月の加治木への上陸者内訳は、フィリピンより、陸軍36名、海軍3名、一般472名。沖縄より陸軍25名、海軍270名。同年11月の加治木への上陸者内訳はフィリピンより陸軍4、613名、海軍1、125名、一般邦人6、600名。沖縄より陸軍974名、海軍107名、一般邦人4名。華中より、陸軍1、003名、海軍446名、一般邦人85名。奄美大島より、陸軍3、158名、海軍400名、一般邦人51名。加治木への上陸者総数は26、780名だから、12月8日までに7、408名が上陸したこととなる。但し、この人々がどこから引き揚げて来たかは資料からは読み取れない。また、早くも10月末には、フィリピンよりの一般邦人472名が上陸していることとなる。

9、送出者の概況（『局史』P53）

送出は、加治木港に揚陸した台湾省民の軍人軍属869名を輸送艦夏月によって昭和20年12月21日に送還したのを嚆矢とし、爾後ジャワ人、中華民国人、琉球人（八重山向け）、大島人を送還せしめたるが、昭和21年3月17日、総司令部の指令に依って南西諸島方面への送還は一時中止されたが、7月24日、総司令部の司令により同方面への計画送還が第1次から第20次まで実施せられることとなり、送還に先立ち、6日間の検疫停留を為し、第1次送還は8月15日開始せられ、12月28日に終了した。送出総人数は54、773名で、方面別に見れば沖縄方面（含八重山向け）46、062名、（84%）で（中略）あった。

《補注》GHQによる昭和21年1月末の「2. 1分離宣言」で、この時期、北緯30度以南の南西諸島は日本の行政権下から分離されていた。そのため、十島、奄美、沖縄の人々は「非日本人」とされ、大島人とか琉球人とかの名で表示されていた。

10、孤児及び無縁故者の取扱（『局史』P59）

引揚孤児は、加治木引揚事務所時代、特にダバオからの引揚者中非常に多く、これ等の孤児は重富教員保養所に収容していたが、最も多く収容されていた時は118名に達していたが、その大部分は栄養失調症であった。即ち当局で取り扱った孤児の数は190名で、この中、比島方面よりの引揚孤児数が175名で81%を占めている。これ等孤児の中、同胞援護会鹿児島支部の孤児院仁風寮に引き渡したものは48名であった。

《補注》『局史』中の統計によれば、フィリピン方面よりの無縁故孤児175名の内訳は、5歳未満、男12名、女16名計28名。5～10歳未満、男41名、女50名、計91名。10～20歳未満、男29名、女27名、計56名。

11、加治木に於ける引揚者中死没者の墓地（『局史』P128）

（前略）昭和20年11月及び12月中、主として比律賓方面から引き揚げて来た老幼婦女子の中に死亡者が続出し、これ等の屍体は加治木の須崎共同墓地に8体、加治木療養所に129体、帖佐療養所に182体、計319体を仮埋葬してあったが、その後、家族が発掘、持ち帰ったので、結局、加治木療養所78体、帖佐療養所149体が残置してあったので、昭和22年1月28日から5日間、屍体を発掘、火葬に付し分骨の上、鹿児島市西本願寺に安置し、引き取り人を待ち、残余骨は前記各療養所に合同慰霊塔を建て、慰霊した。本局閉鎖後の諸事務は同胞援護会鹿児島県支部に委任した。

《補注》上記の「残余骨」は、最終的には南九州病院関係者の手により、塩入錦江小学校裏の吉祥寺墓地に改葬された。1995年10月29日、「魂」の一字を刻した自然石の墓塔の傍らに、墓の由来を記した慰霊碑を建立、慰霊祭を挙行了した。

12、主として加治木事務所時代を回顧する座談会速記録（『局史』P134～142より抜粋、発言者氏名省略）

- ◎ 毛布は陸軍から5千枚、電灯1、500、電線、艇用燃料20屯と、食糧は桜島、岩川、国分、指宿辺りから持ってくる了解を取った。
- ◎ 加治木に棧橋が無かったので、海運局支局長立山さんに頼んで浮棧橋を28日完成したが、その夜、海が荒れたので流失してしまったので、29日、鹿児島から人夫を集めて午後架設した。この日は朝から雨降りで、全員ズブ濡れになって完成した。
- ◎ 第一船入港の状況は？
- ◎ 29日朝、北大東島から9時頃入港した。棧橋が午後1時頃できて、2時頃上陸した。土砂降りで砂糖の荷物が多かったが、上陸する時は30名を一団として米軍がついており、荷物も自分が持てるだけの荷物を持たし、車もなく、歩くのに遅れたりすると、米軍が銃で尻をついたり蹴ったりしたので、気の毒になり私たちが持ってやった。「ハリアアップ」と言われ、初めて米軍を見た連中にはちょっと面白くない空気があった。
- ◎ 検疫は私たち（検疫所）がやり、霧島病院と鹿児島陸軍病院とで医療をやった。
- ◎ 酒樽にクレゾールを入れ、噴霧器で消毒する程度で、検疫とこれでも言われるかというような検疫だった。
- ◎ 輸送は帖佐駅からやったが、この方面の苦労は？
- ◎ 輸送計画もなく案じていたが、当初は三百名程度だったので普通列車で間に合った。
- ◎ 板をよく持ってきたが直ぐ無くなってしまった。死亡者が多かったので、この棺桶を作るのに間に合わせたためだった。
- ◎ タバオから帰ってきたのは老幼婦女子だけで、上陸の安心感からかドンドン死んでいくと言う訳で、全く気の毒だった。
- ◎ 岸壁の草の上に寝せていた女・子供の病人が、「どうぞお願いします」と言うのを見るとほんとに気の毒で、県や巡査に頼んでこれ等の病人を抱いたり背負ったりして運んだ。
- ◎ 気の毒だと思ったのは、「お嬢さん、具合が悪いのではないの」と聞くのに、返事が無いのでよく見ると既に亡くなっていた。その母親は、「楽しみにしていた内地の土地も踏まないで……」と、泣き崩れる姿には私たちも泣かされた。
- ◎ 一晩に50名程も亡くなったことがあった。引揚者などに貸与する毛布等も無く、米軍から注意されて毛布を与えた。
- ◎ 職員の使用していた毛布まで出して、寒いのに閉口した。
- ◎ 毛布の配給は一人死て3枚だった。部屋が満員になった時は、一般民を優先的に入れて、復員者は外に出せと言うことだった。

- ◎ 孤児はどれくらいいたか？
- ◎ 一番多い時は118名で、50名定員の部屋を3室も使った。
- ◎ 屍体は？ 記録はあるか？
- ◎ 300体位だった。記録はある。棺桶が間に合わず5日位置いたこともあった。
- ◎ ダバオから帰った人の中に3名、死亡者があったので、共同墓地に埋葬するようにして帰って来てみると、3名が8名になっているという風で、死亡者が増え、それに埋葬地も狭いので困った。壕を掘って、これに並べて埋葬したこともあった。
- ◎ 今、加治木でやっている残務整理はこの仕事で、今でも時々遺骸受取に見える。
- ◎ 被服も充分に無かったので、女子供にもダブダブの軍服を支給した。米軍のP・Wのままの服装で帰したこともあった。
- ◎ 加治木時代の引揚者が一番気の毒だった。しかし給養の点は満点だった。陸海軍側では四合位支給してくれとの希望があったが、3合平均はあった。
- ◎ 引き揚げと同時に送出国が始まった。台湾人1千名の送出国は米軍の手で行われた。
- ◎ ある日の夕方、宿舎の布告板を明日までに作れと、フェド少尉から命令され、翌朝出来ていなくて全員総動員してやっと出来上がった。当初、上陸した沖縄の人は長期滞留になっていたため、これ等の人に市内に出ないように布告する為の板だった。
- ◎ 引揚者に青野菜を食べさせるということだったが、地元の分は高くて手が出なかった。しかし、学校の子供たちが出してくれた。婦人会から錦江校へ野菜を持ってきてくれたこともあった。その後、農業会、婦人会に連絡して出してもらうようになった。

《補注》「台湾人」とあるのは、戦時中、フィリピン等に送り込まれた台湾の先住民の若者たちを指す。彼等は日本の軍人・軍属として徴集され、現地で軍務や屯田兵的な開墾に従事させられた。フィリピンを引き揚げ、故郷の台湾の沖を通過、加治木に上陸、暫時、山田国民学校に収容された後、20年末に台湾へ帰っていった。

この資料を作成するに当たり、『鹿児島引揚援護局史』の原文を、現代かな遣い、当用漢字に、或いは漢数字を算用数字に変換した部分があること、また、適宜、句読点を付したこと等をお断わりしておきます。なお、《 》中の補注は、当方で入れたものです。

加治木港引揚死没者慰霊祭実行委員会事務局長 川崎兼孝

カリナンの戦争っ子の歩んだ道

沖縄市住吉 仲村愛子

『ダバオ開拓移民実録史』中の表記の文章より、仲村さんが加治木へ上陸されるまでの一部を引用したものである。仲村さん本人及びダバオ会（会長高畑陽一氏、事務局局長田中義夫氏）の御了承を得て、ここに再録した。ご好意に感謝している。なお、（ ）中の注は川崎が施した。

この記録の、省略した部分には、仲村さん達が重富から大分県杵築市寺町、福岡県田川市へと移動、その後、佐世保から故郷沖縄へ帰ったことが記されている。

1995年10月、仲村さんが加治木での慰霊祭参加を前に、表記文章のコピーに添えて川崎へくださった手紙によると、仲村さん三姉妹は、戦後47目年の年、「自分たちの歩んだ道を辿る」ため、鹿児島＝加治木・始良を訪ねている。「記憶を辿り、あの引き揚げた港（加治木）、収容された学校（重富小）、姉が知り合いを探した加治木の病院と、タクシーを走らせ見て回り」、47年前と同じく、日豊本線を上り、「次の土地大分、福岡へと、加治木駅から電車に乗り、十時間余をかけて大分へ着きました」とある。仲村さんは、1995年10月末、再び加治木を訪れ、慰霊祭に参加した。

なお、ダバオ会事務局の御好意で、川崎の手元にお届け下さった『ダバオ開拓移民実録史』中の長野県出身、内山寛治郎氏（ダバオの日本人小学校の校長を辞め、マニラ麻栽培を自営）の文章には、加治木収容所での対応が次のように書かれている。

（前略）祖国の無条件降伏、現地日本軍の降伏投降。邦人も含めて米軍に収容された。米軍貨物船で内地へ送還され、10月20日、鹿児島県加治木に上陸した。引揚者収容所に当てられた小学校（錦江小学校？）に収容され、上陸手続き、行く先調査等で4日滞在した。上陸した私共は、持ち物は何一つ無く、着のみ着のままの姿だったが、米軍から毛布一枚と缶詰の食料3日分をもらった。

米軍の船中での待遇は、敵国とも思えぬ待遇であった。この加治木の収容所では、行く先の不明な混血児や父母と死別して行く郷里も分からない子供は後回しにした。行く先の分かる人々は、鹿児島県知事から見舞金として金10円と、2日分の握り飯と米5合、食券3日分を貰った。加治木収容所での食事は、米飯と味噌汁が出て待遇も非常によかった。（以下省略）